786.1
Y76
786. 1-Y76ウ
1200500752859

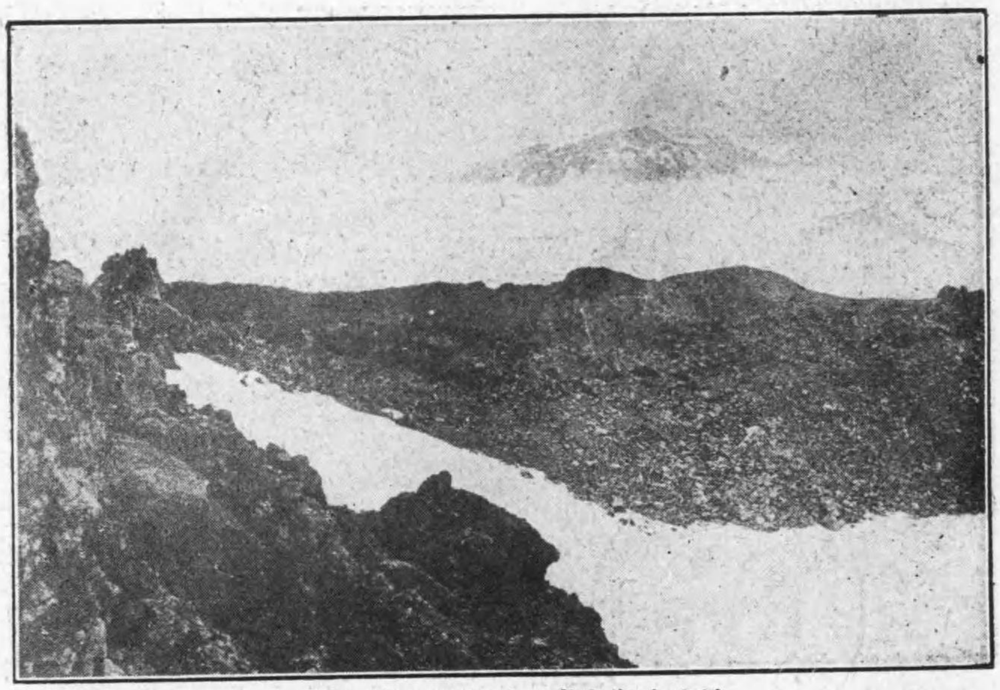
始

コ/829
お
786.1
Y76

横井春野著

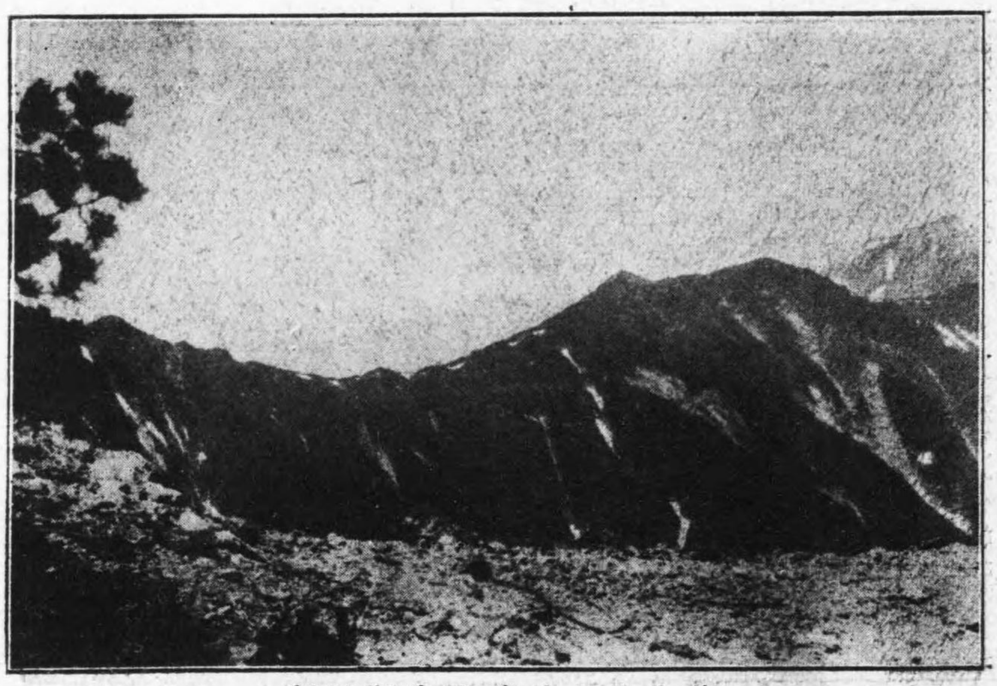
伊の山へ登らふ

昭和三・八・廿 南堂

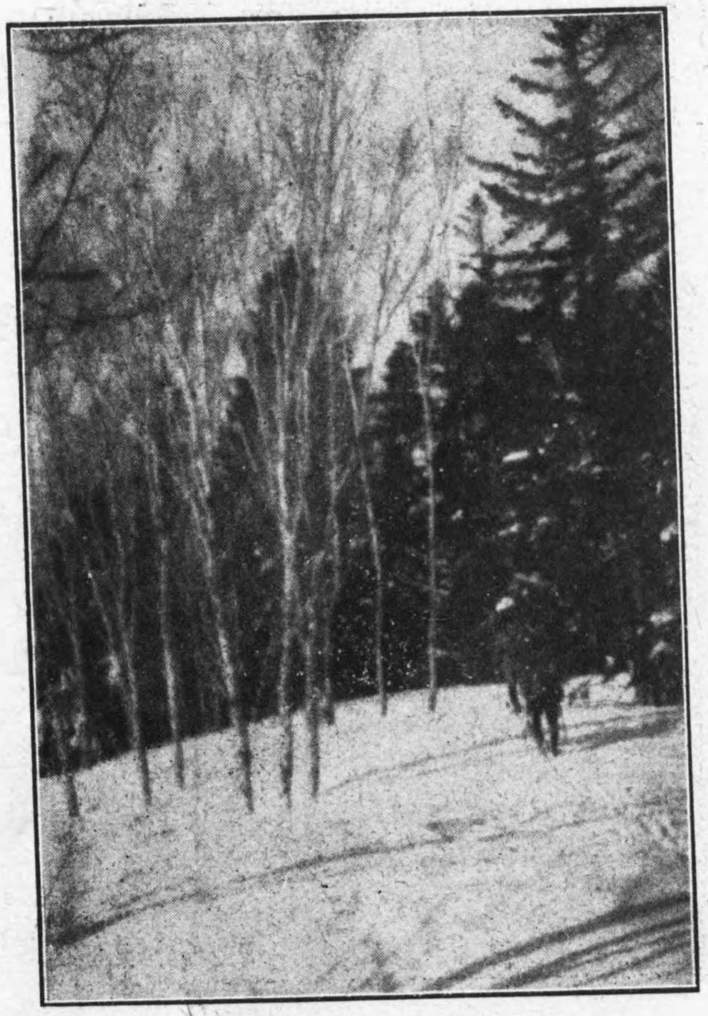


飛驒山脈御嶽より乘鞍ヶ嶽を望む

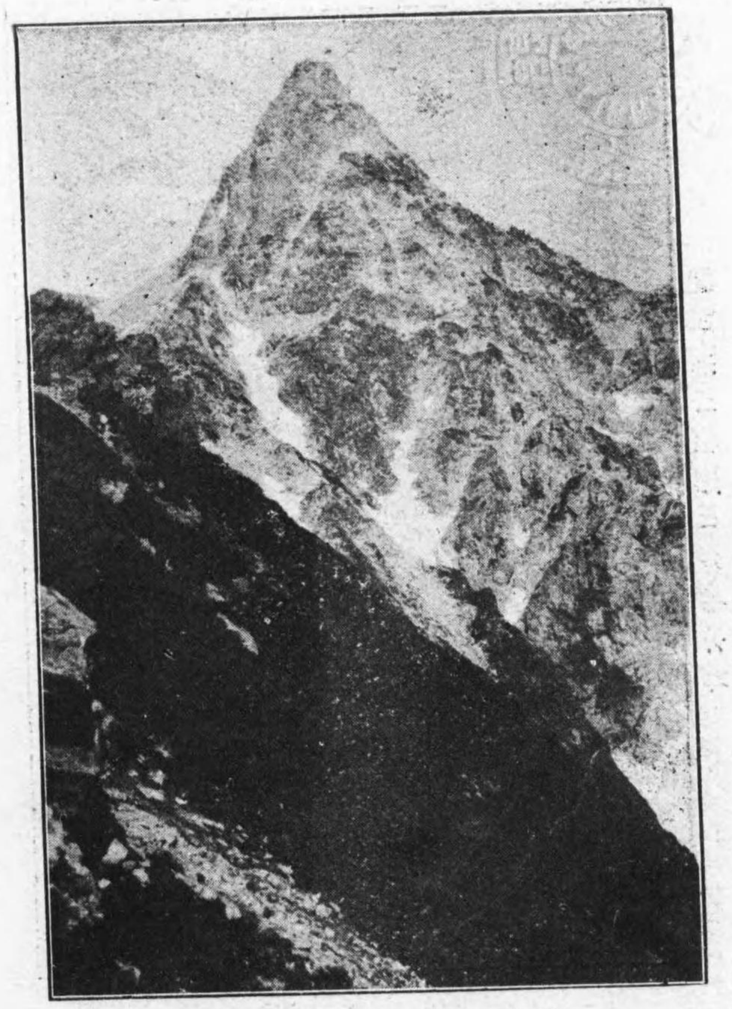
白馬山頂より日本海を望む



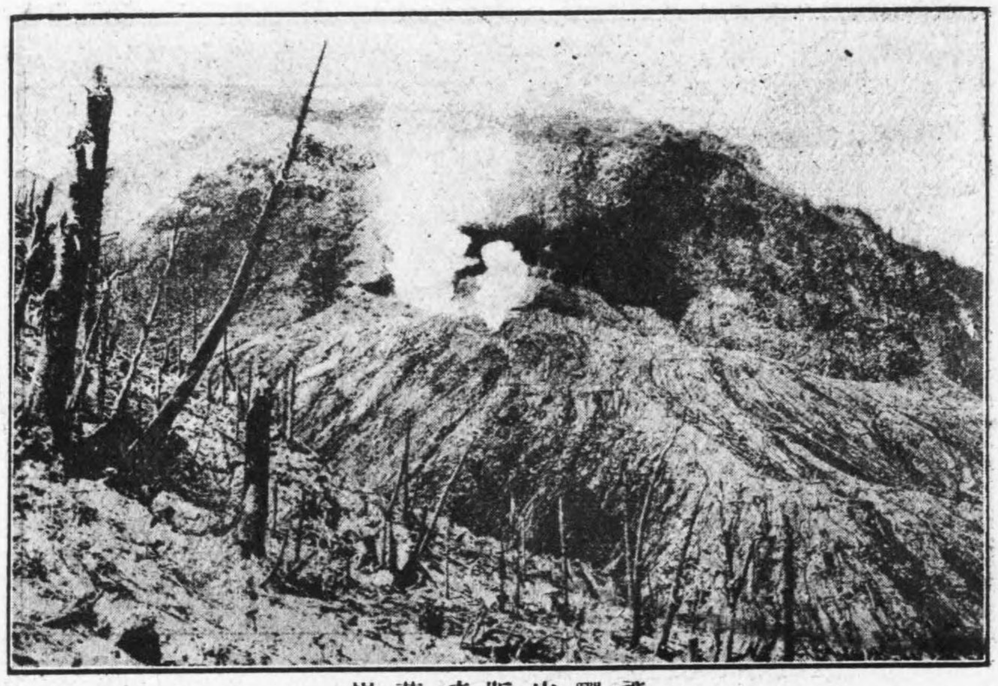
針木峠より飛騨山脈展望



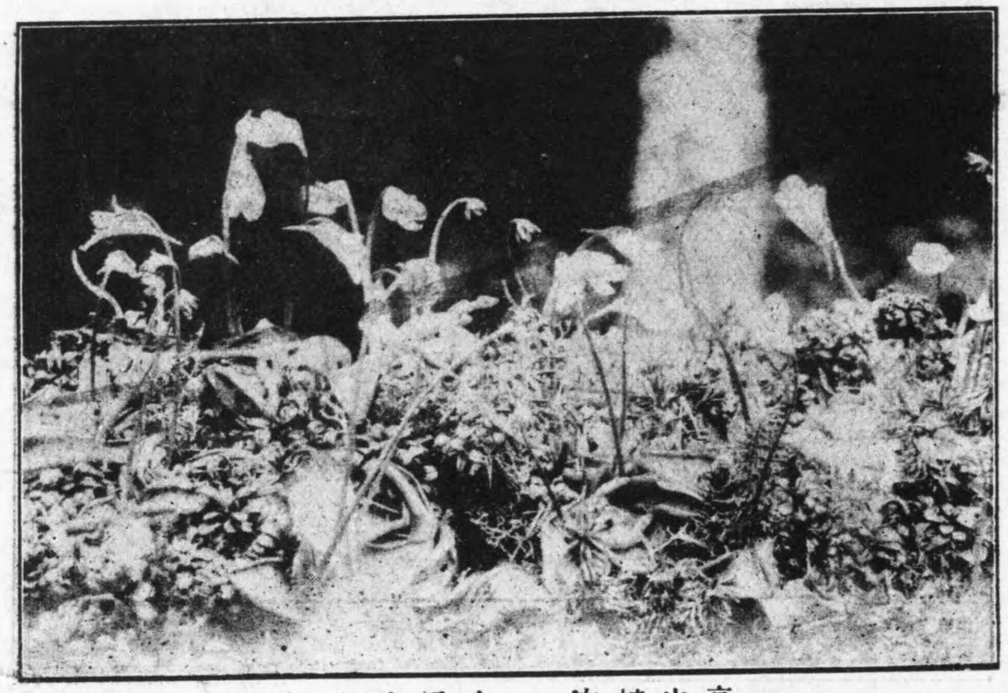
乘鞍ヶ嶽の森林入口



日本アルプス槍ヶ嶽の勇姿

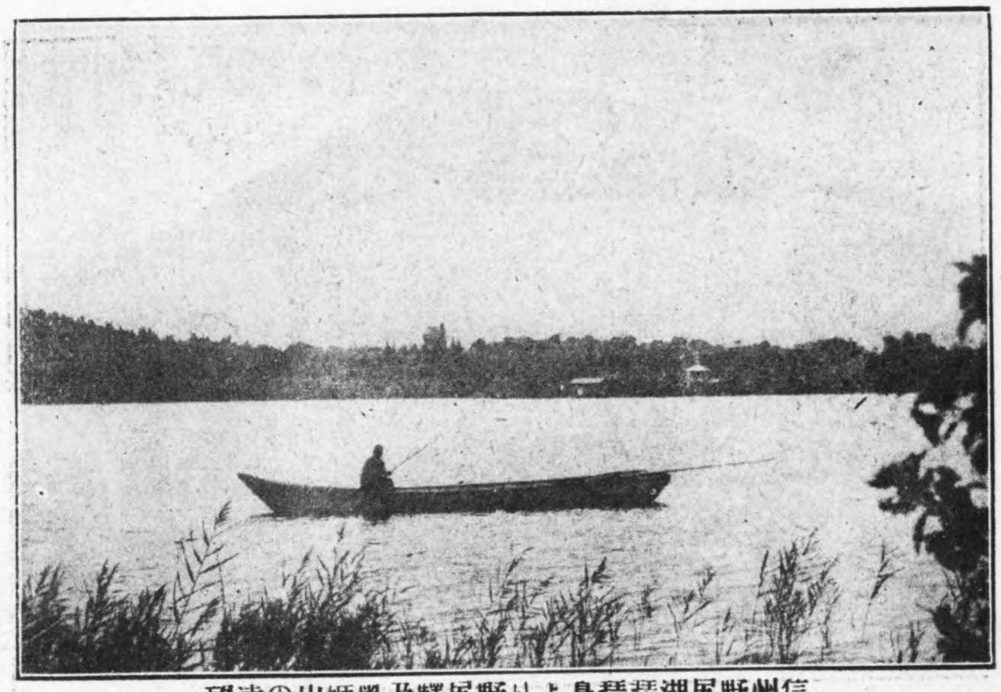


飛驒山脈硫黄嶽



高山植物　虫採すみれ

木曾駒ヶ嶽茶臼ヶ嶽の景

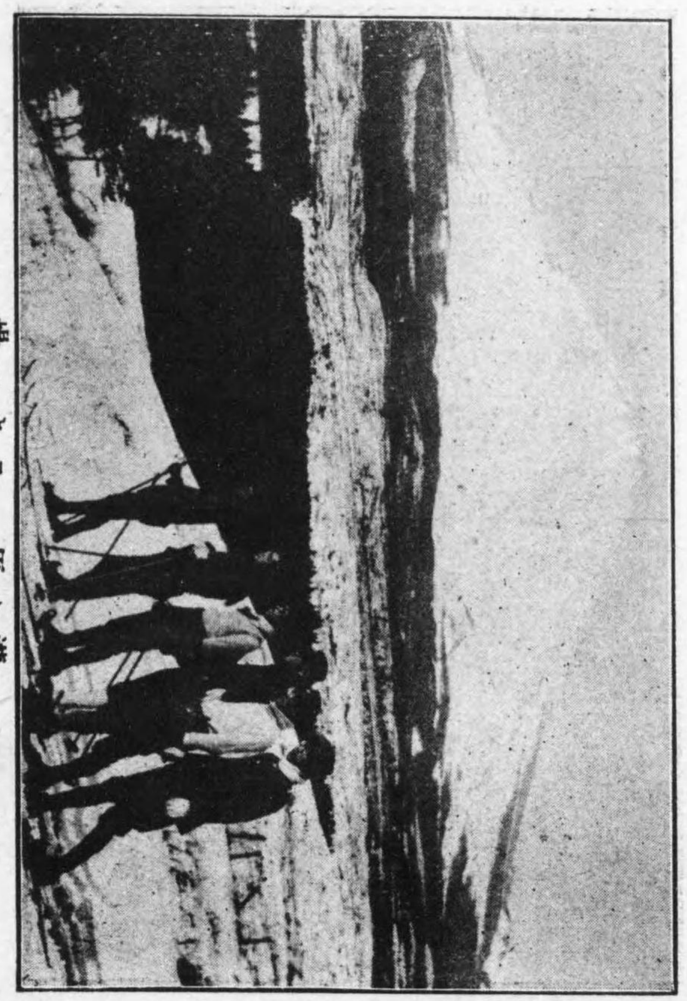


信州野尻湖琵琶島より野尻驛及黒姫山の遠望

富士山頂上　胸突八丁

富士山上頂久須志ケ嶽

飛騨山脈穂高嶽の冬姿



樹ーキス　原ヶ瀬

569-27

はしが

一、僕は幼少の頃から山登りが好きであつた。小學校に通つてゐる頃、亡父につれられて紫向ふ武藏野をあるき廻つた。僕の幼な心に深く刻みこまれたものは富士の雄姿と秩父の連山の神秘的の姿であつた。其後中學に通ふ頃になつてからは、山をこひする情がつもりつもつて、秩父の山へ分け入つた。富士へ登つた。

これ以來僕は暇さへあれば山へ登つてゐる。

一、登山をして國民的年中行事たらしめなければならないと考へついて、熱心に登山を奬勵するやうになつたのは、明治の末年のことであつた。大正二年東京府立三中に教鞭をとるやうになつてからは「山岳狂」と云はれた程に山の愛護者となつた。

僕が登山を奬勵して一部の人から笑はれた當時と、現在とを比較してみると

全く隔世の感なき能はずである。

一、余は明治の末年、登山奬勵の目的で「富士と足柄」と云ふ一書を刊行して以來、山に關する著述をしばしば試みた。「山めぐり」(博文館發行)、「富士と日本アルプス」(博文館發行)、「日本登山案内」(白揚社發行)、「最新富士登山案内」「日本山岳案内」は其主なるものである。多少なりとも登山奬勵の目的を達しえたと信じてゐる。

一、行人社主越雲君は、特志の士である。某日僕を訪ふて「登山に關する執筆を」依囑せられた。僕は、君の熱心に促されて、本書を著はすに至つたのである。本書は、第一篇であつて、漸次各地方に及ぼし、やがては日本全國の山々峰々を網羅したいと考へてゐる。

僕は最近公私多端本書の校正は野球界社同人諸士を煩はした。其勞を感謝する。

昭和二年五月十日　著者　横井春野

日本登山案内　目次

登山の目的……一
登山の準備……三
出發前の注意……五
山麓準備……九
登山實行に就いての注意……九
焚き火についての注意……一三
露營についての注意……一四
險惡なる天候に遭遇した場合……一六
食糧に窮乏を告げたる場合……一七

道に迷ひたる場合……一九
山火事にあひたる場合……一九
猛獸に出あひたる場合……二〇
高山道德を各自に守れ……二二

東海道

相模の大山……二四
丹澤山塊踏破……二六
石垣山、石橋山……二七
十國峠……三八
箱根山……四〇
湯本、塔ノ澤、宮ノ下……四一
堂ヶ島、底倉……四二
木賀、强羅、小湧谷……四三
芦ノ湯、湯ノ花澤、姥子……四四
仙石……四五
大平臺、元箱根、箱根町、大湧谷……四六
神山……四七
駒ヶ岳……四八
二子山……五〇
鞍掛山、箱根嶺……五一
長尾峠、乙女峠、金時山……五二
足柄の碓氷峠……五四
明神岳、明星ヶ岳……五五

箱根一泊探勝案……五六
道了山……五六
矢倉岳……五九
愛鷹山……六一
達摩山……六二
眞城山、天城山……六三

富士登山

富士と云ふ名義……七〇
富士と噴火……七一
富士山の歴史……七九
富士の植物……八〇

大宮口……八二
須走口……八三
吉田口……八四
富士は公園……八七
登山口……八八
中道廻り捷徑……八九
富士山の異名……九〇
大宮口……九一
須走口、御殿場口……九二
須走口……九四
吉田口……九五
各口代表旅館と物價……九八

御中道廻り……一〇一
頂上御針廻り……一〇三
僅か八丁歩けば頂上に行ける……一〇四
富士登山案内……一〇四
兵麓廻り……一〇五

房總方面

清澄山……一〇八
鹿野山……一〇九
鋸山……一一〇
富山……一一一

中央線

御嶽山……一一三
大嶽山……一一三
御前山……一一四
大菩薩峠……一一五
飛龍山……一一八
唐松尾……一一九
小佛峠……一二〇
高尾山……一二八
燒山から丹澤縱走……一三〇
岩殿山……一三一

百藏山……一三三
三ッ峠山……一三四
御坂峠……一三五
神座山……一三六
十二岳（精進ハノラマ）……一三七
笹子嶺……一三八
乾徳山……一三九
甲州御嶽……一四〇
金峰山……一四一
身延山……一四四
茅ケ岳、八ケ嶽……一四六
立科山……一五六

和田山……一五七
鳥居峠……一五八
木曾御嶽……一五九
冠着山……一七四

日本アルプス

日本アルプスの名義……一七八
北、中央アルプスの概觀……一七九
北日本アルプスと南アルプスの比較……一八一
四ッ谷口……一八二
大町口……一九〇
中房口……二〇九

豐科口……二二三
烏川一ノ澤口……二二四
上高地口……二二六
燒嶽登山……二三一
白骨口……二三九
乘鞍嶽……二四〇
立山連峰方面……二四七
松尾峠から立山溫泉へ……
劍嶽登山、有峯より藥師嶽へ……二四八
黑部峠谷……二五三
早奈月から立山へ……二五三
黑部から白馬嶽へ……二五五

中央アルプス

木曾駒ヶ嶽……二五六
惠那山……二五九
中央アルプス縱走案……二六〇

南アルプス

大河原口……二六一
赤石三山踏破……二六三
赤石以南縱走……二六三
赤石山脈橫斷……二六四
赤石橫斷……二六五

上村登山口……二七一
赤石山、芦安口……二七二
鹽澤溫泉口……二八三
柳澤口……二八六
山勢概要……二八七
登山季及用意……二八八
甲斐駒ヶ嶽方面踏破案……二九二

信越線

碓氷峠……二九四
淺間山……二九五
黑姫山……二九七
飯綱山、戸隱山……二九八

秩父アルプス

武甲山……三〇四
三峯山……三〇五
雲取山……三〇六
將監峠……三〇七
雁坂峠……三一二
國師嶽、甲武信嶽……三一三
十文字峠……三一四
奥千丈ヶ嶽……三一五

何の山へ登らふか

箱根、富士、日本アルプス、秩父アルプス
武相甲信豆、五州の名山案内

鶴城　横井春野著

登山の目的

我々が山へ登る目的は、人々に依つて多少の相違があると思ふ。或る人は、身心の鍛練を目的とし、又或る人は學術の研究を目的とすると云ふが如く、目的其

ものに相違のあることは勿論である。

けれ共、私が、明治三十八年以來、登山を奬勵して國民的年中行事たらしめんと努力する所以は、

1　强壯無比、抵抗力に富む身體をつくること

2　人格を修練すること

にある。歐洲大戰役に當り、獨逸が四面楚歌の中にあつて、外敵を一歩も國内へ侵入せしめなかつた原因は、獨逸がビスマーク以來官民一致して、國民に登山教育を施したが故であつた。

山は、國民の體育場であり修身の講堂である。幸ひにして我が國は至る所に山がある。我々國民は天與の體育場であり修身講堂である所の山に遊んで身心を鍛練しなければならない。我らは共力一致して山登りを國民の遊技たらしめなければならない。

明治三十五六年前迄は、山は修驗の徒もしくは白衣の徒の專有物であつた。これ、山登りは、古へ修驗者に依つて開拓せられたがゆゑである。

山登りが修驗の徒から解放せられて、男も女も、年若きも老いたるも山へ登るやうになつたのは、明治の末期から大正の始めからである。高山登りの歷史については拙著山めぐり（博文館發行）日本登山案内（白場社發行）を參照せられたい。

登山の準備

登山者が準備すべき事柄は凡そ左の通りである。

(1)　登山の目的に依つて適當の計畫をたてること

(2)　登山計畫をたてるに際して注意すべき點

(イ)　登山せんとする山岳に對する地圖、地誌其の他記錄に依つて狀況を充分に研究すること

（ロ）登山經路に於ける山道、小徑、岐路、捗徑等をつとめて研究すること

（ハ）登山に經驗なきものは必らず案内者を同行すること（富士御岳の如く登山者の多き山には案内者なくとも宜し）

（3）順路及び日定の豫定

（イ）山中に於いては思はざる障害に遭遇するものであるからして、十分時間の餘裕を見て計畫をたてること。

（ロ）登山行程は一行中最不健脚者を標準として決すること。

（ハ）一日の行程は日没前少し早や目に目的地に達するやうにすること。

（ニ）濃霧多き地方においては、午前中に頂上に達するやうすること。概して高山は午後は雲或は濃霧のため展望がきかない、

（4）圖面地誌類の選定

五萬分の一地形圖を標準とすること。地圖は表面を内側にして折込み、折り目を損せざるやう注意すること

（6）天候について出來る丈け研究すること

（7）山麓の村落について、案内者人夫の有無、地方病風土病の有無を研究すること

出發前の注意

（1）登山せんとする山岳地方の大略の天候を中央氣象臺或は地方測候所に問合せること

（2）健康上疑問のある者は一應身體檢査をしておくこと（山登りは鍛錬育なるがゆえに體力薄弱のものには適しない）

（3）服裝

（イ）衣服

背廣、詰め襟服、半ヅボンを可とし、和服は不可。（カクシを多くすること）

（ロ）裝身具

脚絆、ゲートル、靴、わらじは各自使用になれたるものを擇ぶこと。脚絆は紺色をよしとするこれマムシ、毒蟲は、紺色をいとふが故である。

靴下、紺足袋は丈夫なるものを用意し、縱走等の場合には、少しく餘分に用意すること。シャツ、腹卷は十分に用意すること。特に腹卷は必要である。露營をする場合には毛布の用意が必要である。

雨具としては、頭巾着外套、合羽類がよい。帽子笠は適宜にて可なるも帽子の方が便利である。

縱走、横斷には丈夫なる手袋を必要とする。

（4）登山と携帶品

富士や御岳、白馬の如く通俗化した山へ登るには殆んど何らの準備を要しないが、苟も縱走でもしやうと云ふには、相當の準備を要する。

登山囊を用意すること。

時計、磁石、呼子笛、地圖、手帖、鉛筆、半紙類、等を携帶すること。

深山を跋渉する場合には、鋏、毛拔、洋刀、鋸、鉈、鎌等を用意すること。

金剛杖、登山杖を用意すること

手拭、風呂敷、麻ナワ、小田原提灯、桐油類を用意すること。

露營用の天幕を用意する時には分解しうる輕便のものを用ゐること。

吸筒、アルミニューム製コップ、掛替の眼鏡、燐寸（しめらざるやう油紙にてつゝむか若しくはブリキ器に入れること）等を用意すること

（5）食糧

握飯に梅干を入れたるものをよしとする。平常より多量に準備すること。

露營用としては、白米、鰹節、ホシヒ、食用バスケット、メリケン粉、切

餅、罐詰の類を用意すること。鰹節は不時用として最も有効である。余は南日本アルプスに於いて鰹節一本で一週間露命をつないだことがある。副食物としては食鹽、梅干、味噌、漬物、干物類がよい。（米は多量に用意すること）

疲勞を醫する間食物としては、氷砂糖、飴類、（キヤラメル）鐵砲玉の類がよい。

興奮用としては、燒酎、ブランデー、ウイスキー等がよい。（特に山醉ひの時に用ゐると効果がある）。

（6）藥品

木曾御岳山發賣の「牛込納戸町大黒屋發賣」を用意するとよい。内服藥として又、外科用藥劑として効果がある。

寶丹、清心丹、健胃劑、解熱劑、鎭痛劑、硼酸、アンモニヤ水、ヨジウムチンキを用意すること。毒蟲に刺された時にはアンモニア水、怪我した時にはヨジウム・チンキがよい。繃帶、ガーゼ、絆瘡膏、即効紙の類は忘れてはならない。

山麓準備

登山者多き山は別問題として、然らざる山へ登る時には案内者と強力を雇ふこと。

山麓住民の經驗者、所轄林區署、巡査派出所、町村役場について山地の狀況を調べること。

登山實行についての注意

（1）登山者をして安全ならしむるの秘訣は「細心にして大膽なれ」の一言で

つきる。

(2) 一行中に脚力最も弱きものを標準として行動すること。

(3) 常に圖面によつて自己の所在地を會得すること。

(4) 道筋を擇ぶについての注意。

概して云へば、谷筋、中腹、蜂筋の山道中、中腹路は安全である。但し岐路に迷ひ易く往々崩壞地があるからして注意せねばならない。

(5) 山道の歩行に對しての注意。

(イ) 足の爪は短かく切つておくこと。

(ロ) 足裝束は少し具合がわるくとも直ちになをすこと。

(ハ) 帽子の中に潤葉を入れておくこと。(大いに清涼をおぼえる)

(ニ) 下腹部に力を入れ姿勢をくずさず呼吸は鼻孔のみにてなすこと。

(ホ) 登山は決して急いではいけない。能狂言式に、ソロリソロリとまるらふと云ふことが秘訣である。

(ヘ) 飲酒は絶對にさけなければならない。

(ホ) 呼吸はげしき時は立ちどまつて、深呼吸をすること。

(チ) 渇をおぼえた時は、水を口に入れて口を嗽ぐこと。水を飲むことはナルベクさけること。

(リ) 測圖の心えあるものは、見取圖を作製すること。或は、樹木、巖石等にしるしをつけておくこと。

(ヌ) 下り道は、えて足脚を痛めるものであるからして、十分注意すること。吊り橋、丸木橋は、注意してわたること、

(ル) 溪流の徒渉は水幅の廣き地點をえらぶこと。(狹き所には往々深瀬あれば危險である) 激流を渡るには棒渡し、綱渡しの法がある。急流は流れに從つて斜めにわたるを可とする。

（ヲ）山中には往々野獸の陷穽、裝置銃がある。注意せねばならぬ。

（ワ）疲勞者は兩手に杖の後端をもち、强健者に前端を曳かれて進むを可とする。

（カ）古小屋内には害虫が生存することがある。

（ヨ）虻、蠅は、黑色のものにたかり易い。其群襲にあひたる時は潤葉樹の葉付きの小枝を以て拂ふをよしとす。

（タ）蜂類は、篠藪、荆棘、小灌木の密生せる日當りよき場所に多い。注意すべきである。もしも其襲擊に遭遇した時には、地面に伏して之をさけるをよしとする。

（レ）山蛭は、谷澤の繁茂せる潤葉樹林内に生活してゐる。注意を要する。

（ソ）蝮は谷間、山腹、岩上、樹枝、熊笹等に蟠居してゐる。蝮に咬まれた時には局部を十分にしばり、小刀で肉をさし十分に血液をしぼりとり、ヨジウムチンキをつけておいて醫師にみて貰ふことが必要である。

焚き火についての注意

山中にて焚き火を行ふ目的は、

（イ）採暖

（ロ）煮沸

（ハ）夜間の濕氣乾燥

（ニ）虫類、獸類の襲擊防止

（ホ）遭難の場合の信號用

である。之を行ふ場合には、出來る丈け地皮物なき所をえらぶを要す。往々焚き火から山火事を起すことがあるからして注意せねばならない。雨中、燃料がしめ

つてゐて、點火しがたい時には、生木の枝を削つて焚きつけとすることが肝要である。能く燃ゆるのは

樺(樹皮)、檜(樹皮)、松、唐松、白檜、栂、イタヤカヘデ

の類である。石油の少量を準備しておくことが大切である。

露營についての注意

(イ) 露營地は、飲用水燃料採取に便なる場所を可とする。けれ共谷間は不慮の出水、土砂崩壞、空氣の流通あしき缺點があるから、出來る限り高き安全な場所をえらぶをよしとする。但し、陰樹の林の附近はよいが、陽樹のまばらにはえてる所はさけるべきである。

露營地に於いては日沒前に

(一) 天幕をはること

(二) 寢臥すべき裝置をすること

(三) 燃料を集め食糧を調理すること

敷物としては、萱、羊齒類及梢類にして、葉の密なる樹枝をしき上に防水布、油紙をおくこと。敷物としての樹葉は、輕き燒き火にかざすこと。(附着せる虫類を除くために)

露營には夜を徹して焚き火をなすことが肝要である。(火器に窮したる時は、双眼鏡のレンズを以て太陽より導火すること。又檜の木片を堅く摩擦して發火せしむることがある)

六千尺以上の高處では、氣壓の干係からして、食物を熟煮することが困難であるからして、煮沸器の蓋を布類で密閉し其上に石等の重しをおくことが肝要である。煮炊具なき場合には、水に浸したる米を布又は袋にてつゝみ、土を掘つて之をうめ、其上にて焚き火をすること。

メンツウの類に水を盛りたる中に赤熱したる小石數個を入れ、之れに味噌もしくは山菜の類を入るれば食汁をつくることが出來る。

險悪なる天候に遭遇したる場合

（イ）濃霧の襲來を豫知したる時は、岩陰又は樹林地で避難すること。この際決して狼狽せず靜かに行動すること。

濃霧は激烈な寒冷を伴ふものであるから、十分注意すること、昔、山伏修驗の徒がもつてゐたホラ貝を吹くことは、濃霧に際會した時に有効であるからである。序で乍ら山伏修驗の徒がホラ貝を携帶してゐた理由は、

（イ）信號用

（ロ）猛獸除け

（ハ）暖をとるため

（ニ）霧を拂ふため

であつた。

（ロ）暴風雨に出あつた時は、風當り強き峰筋をさけて出來る丈け立木地、岩陰等に避難すること、この際決して狼狽してはいけない。

（ハ）深山では少時間の降雨でも意外に出水することが往々あるからして注意せねばならない。（ソノ代り減水も早い）

（ニ）迅雷の際に、孤立木、大木の下、林緣は危險であるからして立ち寄つてはいけない。

食糧に窮乏を告げたる場合

（イ）一行中に比較的健全者に食糧の殘余を給して、山麓、或は山小屋と連絡をとらしめること。下山に際しては道しるべをつけておくこと。

（ロ）饑餓甚しき時は、帶で腹部をしめること、又は靴の革を甜ること。氷砂糖、キラメルは饑餓をしのぐに大効がある。

（ハ）　饑餓甚しき時は、鳥獸、魚類の他左記の草木を採取して食料とすること

杉松の亞皮、ウルシノキの嫩芽、タラの芽、ヤマイチゴの實（ツルイチゴは有毒）

ヤマカキの實、ハシバミの實、ブナの實、クリの實、クルミの實、ヤマナシの實、ヤマモヽの實、ズミの實、ガンカウランの實、笹の若根

筍、

以上木竹類、

山芋の根、ムカゴの實、山ウドの實、フキの莖、蕨の莖及根、ゼンマイの莖、葛の根及嫩芽、百合の根、スカンボ及びイタドリの莖及葉、カタクリの根、イラクサの嫩芽、シドケの莖、ウルイの莖、アザミの嫩芽、シエデの嫩芽、アケビの實及嫩芽、ミヅの莖、シラクチの實、山ブドウの實

以上草類、

山中には食糧品はいくらもある、決して餓死するやうなことはない。

道に迷ひたる場合

（イ）　磁石に依つて方角をしり、周圍の地形に依つて自己の所在地地點を見出して進路を決すること。

（ロ）　方角を得がたき場合には、主なる谷筋に沿うて下ること。下り路をとれば多くの場合山小屋、人家に出あふのであるが、火山地方及古生層の溪谷は急峻にして危險を伴ふことがあるからして注意せねばならない。

山火事にあひたる場合

（ハ）　火事にあひたる場合峰に向つて走るは危險多きを以て谷間の方向ににげること。

（ニ）風と反對の方向ににげること。

猛獸に出あひたる場合

（イ）深山では、曲り角、大なる岩石、轉倒木の陰などで猛獸に出あふことがある。故にかゝる地點を通過する際には、雜話をなすか又は鈴、ラッパホラ貝、呼子等を鳴らすことが大切である。かくすれば未然に猛獸との遭遇をさけることが出來る。（猛獸、毒蛇よけには煙草を吸ふことも一法である）

（ロ）熊に出あひたる時は、機先を制して大聲を發することが必要である。余は、妙高で熊に出あいたる時、謠曲山姥後の出を謠つて之を退散せしめたことがある。

（ハ）熊に出あいて之をさける爲めに樹へ登る際には太き樹木に登るをよしとする。細き場合には搖り落されるうれいがある。

（ニ）突然熊に出あふと、熊は後脚で立ち上るを常とする。この場合には直ちに直立して丹田に力を入れて睨み返すと熊は横に逃げる。此際飽く迄も强氣に出なければならない。少しでも弱は氣をみせると、熊は踊りかゝつてくる。

（ホ）熊其他猛獸に襲はれた時には、

（イ）赤色の布片を枝に立てかけておいて逃げること。すべて獸類は赤色を恐れる。

（ロ）洋傘をひろげておいて自身は横道にかくれること。

（ハ）荷物、衣類を投げすてゝおいて自身は横道へかくれること。

（ニ）北海道などの平地で出あつた時には、全速力で走れば大丈夫である。熊の一時間の走力は平地で二里弱であるから、追ひつかれる心配はない。

高山道徳を各自に守れ

日本人は概して公徳心にかけてゐる。日本人は高山へ登ると、高山植物を濫收する。露營地をよごす。禁鳥を捕獲する。あらゆる不道徳を敢えてして恬として恥ぢない。これ吾人の最も遺憾とする所である。

今後は、登山者各自に、公徳心を重んじで、山の神聖をけがさぬやうにせねばならない。特に注意すべきは、

（イ）露營地の附近をよごさぬこと。汚物は穴を堀つていけておくこと。

（ロ）高山植物を濫獲せぬこと。

（ハ）禁鳥を捕獲せぬこと。

（ニ）樹木岩石等をよごさぬこと。

である。

東海道線

相模の大山

平塚驛から頂上迄四里半。驛から子易迄自動車（一圓十錢）馬車（六十錢）の便がある。子易から頂上迄一里半。約三時間かゝる。この登山口は東口と云はれてゐる。

西口は、二ノ宮驛で下車し秦野迄湘南鐵道でゆく。（四十五錢）煙草の産地として有名な秦野から山麓簑毛迄、一里半簑毛から頂上迄一里半で樂に登れる。西口から登つて、東口へおりるか東口から登つて西口へおりるをよしとする。

大山は、海拔四、一三四尺、神社の拜殿は（三、四五〇尺）、別稱を雨降山、阿部利山、大福山、如意山と云ひ、頂上に阿夫利神社がある。

相模ねの　いつれは　あれと冬立ば

雨降山ぞまづ時雨ける　　春海

阿夫利神社は雨降神社とも云ひ、古へは石尊大權現犬山不動とも云はれた。

祭神は大山祇尊であつて御神體は一個の岩石である。日本武尊東夷御征討のみぎり此岩に座して憩ひ給ふたとの傳說もある。往時は眞言宗の佛刹で、雨降山大山寺と云ひ、坊舍十八院を有したが、今は神佛の區別を明かにして縣社に列せられた。拜殿より絕頂石尊さまのある所迄二十八町ある。其前宮を小天狗、奥宮を大天狗と云ふ。山上不動堂の北三丁に不動瀧、一ノ華居の上方霞ヶ原に大瀧がある山頂より武相の平野、馬入の溪谷、三浦半島、安房上總の連丘、丹澤山塊、富士山等を大觀する風光は雄大である。（天平勝寶七年、良辯當山を開き神社佛閣を造立すとの說がある）

山麓大山町は、大山の脚に當る所にあり、數十軒の御師の家があつて講中を泊める。又旅館もある。（大山町旅館、伊豆屋、竹本屋）大祭は四月十五日より廿四日、七月二十七日より八月十七日迄である。

備考

大山附近で登るべき山としては

鳥尾山（北秦野村大字横野字旭向より登る）

春獄山（東秦野村大字蓑毛字上川原より登る）

かある。杖曳くも面白かるべし。

古來關東地方俗信の的となつてゐるので、登山者は多い。昔は、大山から道了へゆき、更らに富士へ登るものが多かつた。山は大いに俗氣をふくんでゐるが、家族づれで遊山氣分で登るには誂へ向きの山である。

丹澤山塊踏破

丹澤山塊の盟主は丹澤山(一五六七メ!トル)であつて、この地方は大正十二年の大地震の根源地である。この山塊の名は、地震前迄は一般人に知られてゐなかつた。地震に依つて有名になつたのである。左に記載する田中氏が雜誌野球界に寄稿された紀行文によつて計畫をたてるをよしとする。

五月卅一日東海道松田驛に下車したのは夜の十一時〇一分。直ちに丹澤山中の玄倉

溪を指して出發した。提灯をつけて三里の夜道を寄村に向ふ。四十八瀨川の架橋を渡る。河鹿が盛んに鳴いてゐる。

二、諸士平へ (六月一日)

中津川の溪谷の崩崖を横切る危い夜道を辿つて午前一時三十分萱沼の部落に入つた山中のこの部落は震災後水脈が百八十尺も低下して井戸が井戸の用をなさず村民は水に苦しんでゐるこの深夜にこの村人は十數丁の下の川から用水を汲み上げてゐた。

村をすぎて峠を下り彌勒寺の村に入る一番鷄が鳴いた夜明けはもう間もあるまい三時頃村を離れて愈々寄澤の溪に入つた植林は崩れ泥流は山峽を埋めて溪は慘憺たるものであつた。巨幹半ば以上埋れた大樹は河原の中に林立して奇觀を呈してゐる大自然の威力に今更の如く驚怖の感を起す約二時間も河の中原を溯ると果然轟轟たる水音が聞えて來た左方の崩落して絶壁に一溪流が瀑となつて懸つてゐる。

水は遙かの崖上より瀑となつて白布四十餘尺を落下する樣は仲々の壯觀である、たとへ此瀑布が永存性に乏しいとはいへ丹澤山中の一景としての價値がある。

五時三十分大山祇命を祭る山神の石祠に朝食をとつて更に崩落の溪を登る急傾斜となる水は所々に瀑となつてゐる遂に七時十分玄倉谷に通ずる乘越へ出た。

前面に壯大なる富士、南アルプスの雪に輝く連山を指點する展望は頗る良い十分休憩を終へて溪を下る聳立する四圍の山岳はいづれも山崩れを生じて岩骨稜々たる峯である。

玄倉川を渡つて河原を二、三町溯れば右岸の杉の木立の間に諸士平の製板所が散在してゐる鷄の聲が聞えてくる。茲にある御料局の官林事務所にお茶の接待になり乍ら震災當時の話を聞く。

錚々たる玄倉溪谷には巨木類々たる流木が散亂してゐる何れも山津波になつて押出されたものである而して此流木を燒いて製炭を事業としてゐると話された。

三、熊本澤溯行

午前九時再びリツクサツクを負うて出發する。駒鳥鶯が盛んに鳴いてゐる。此からは未踏の山中である北より來る湧津澤を徒渉して本谷に入る道は全くない兩岸はせまつて斷崖がつゞく人は僅かに溪の中を溯るのだ四十分を要して丹澤山塔ヶ岳より來る箒杉澤の合流點熊木に到達した。製板小屋は泥流に埋められてゐる寥々たる附近の慘狀は昔日のおもかげは全くない。

蛭ヶ岳から起つた恐ろしい山津波は丹澤山中の此の桃源峽を廢滅してしまつたのだ黑木立の深い處に梟が鳴いてゐる此處から仰ぐ丹澤山最高峰蛭ヶ岳には物凄い絕壁が懸つてゐるあの崩崖がどうして登れようか。

熊木澤の溪は溯るにつれて險惡の貌を呈して來た水は盡きて棚が現はれる個澤は益々急になつて遂に崩崖に窮つた藤蔓にすがつて攀登るガラ〳〵と墜石は空を切つて落ちるはるかの溪間に反響して物凄い、蔓が切れゝば身は千丈の溪谷に逆落し足が震へて仕方ない。

奮鬪努力は遂に恐ろしいロツククライミングに終つた苦むした樹幹の間を辿ると頂上に近づく。小岩つゝじ富士櫻の小花の美しい蛭ヶ岳頂上に零時卅分到達することが出來た。

四、最高峰蛭ヶ岳

海拔一六七〇米の蛭ヶ岳頂上には藥師の石像が安置されてある展望は頗る雄大だ箱根山、愛鷹山、富士山、山中湖中かに雪に輝く南アルプスの連嶺近くは鬼ヶ岩から丹澤山塔ヶ岳に至る山梁、足下は今登り來た熊木澤の溪、西は檜洞丸より大郡山に連る山々は歷々指點することが出來た。

頂上の南面は地震に生じた深い絕谷を型作つてゐる塔ヶ岳、不動の峯の玄倉谷に懸る恐ろしい山崩れは綠の樹枝を埋めて暗灰色の地膚を露出してゐるあたかも戰敗れた武者の劍と言はふか。

いつの世にか再び綠濃い樹々に包まれた丹澤山になるであらうか暗灰色の敗慘者の傷は何日の後に慰されるであらうか恐らくは到底自分の生命の灯の消る迄再び元の森林美に富む丹澤山とはならないであらう。郭公頻りに昔を慕うて悲しく鳴いてゐる。

諸土平で聞いた塔ヶ岳の孫物岩は、激震のため溪へ落ちたとのことである今最高峯から望む塔ヶ岳の慘憺たる山崩れは當時の激震を想像するに難くない果して斯の如しとするならば丹澤山の一名所は永久に消えたことになる。

丈餘の熊笹繁茂した三境山、藪潛りひどい龍の番場方面を割愛して蛭ヶ岳を北へ降つた。

五、燒山尾根縱走

海拔一四〇〇米突の姫次の原に午後二時十五分休憩する附近は非常に震災は少ない尨大なる此の茅戸に立つて立る丹澤山塊は印象深いものである。

廣い防火線に沿うた尾根道を燒山に向ふ右は島屋谷、左に秩父連山、大菩薩嶺を眺め乍ら行く。午後四時二等三角點と雄大なる展望を以て知られた燒山頂上に達した。

頂上にある石祠は只一つ倒壞してゐる。神ノ川には霧が湧いた。ふりかへれば今日越えた蛭ヶ岳の圓頂形が鮮かに眺められる玆に最後の一瞥を送つて長驅直ちに青野原村西野の里に下つた。

落陽の紅に道志川を彩る頃、久戀の丹澤山に登るを得た喜びを抱いて中央線與瀨驛に急いだ。（田中氏）

◇脇水鐵五郎氏云ふ

丹澤山なる名稱は、地理、地質、山林に關係ある人々の間には從來かなり聞こえてゐた。

しかし、それが一般人士の間にも著名になつたのは、去る一月十五日の地震からである。

卽ち十五日の午前六時、都人士の曉の夢を破つて、昨年九月以來の恐慌を再び起こさしめたあの强震の震源地が丹澤山であると發表せられてからである。

されば震源他としての丹澤山について述ぶる前にまづその地理上の位置と名稱の適用範圍について一通り述べて置く必要があると思ふ。

丹澤山といふ山は、かの阿夫利神社(通稱大山さん)の所在地として登山者並びに信仰者の間には、かなりその名を知られてゐる相模大山の西北一里の地點にある標高一五六七メートル餘の高山である。

大山の方は丹澤山にくらぶれば、一二〇メートルも低いけれども、馬入川の平野に臨んで形勝の位置を占めてゐるから、東海道線の列車の窓からも、その針のやうにとがつた特有の山貌を望むことが出來るが、丹澤山の方は山岳重疊せる奥地にあるので南方の平野からはその雄姿を望むことが出來ない。

山に最も近い秦野の町からでも、その山頂に達するには約六里の難路を跋渉せなければならぬのである。

しかし震源地としての丹澤山塊は、この標高一五六七メートル餘の一高山を指すのではない。

地圖を開いて關東平野の西邊を一瞥せられよ。その西邊には世俗のいはゆる秩父の連山が起伏重疊して廣大なる關東山地を構成してゐるが、南端が相模川(相模川は下流を馬入川といひ上流を桂川と稱する)の長流によつて主體から分かれて、別に一山塊をなしてゐるのを見るであらう。

そしてその山塊は相模川の一大支流なる道志川の峽谷によつて更に西北部の道志山塊と、東南部の丹澤山塊とに分かたれてゐる。

卽ち丹澤山塊とは、北と西は道志川によつて道志山塊と相對し、東は馬入川の平野に終り、南は秦野盆地と東海道線の通ずる酒匂川山谷を境とするやゝ長方形をなせる山地の總稱であつて、丹澤山がこの山地の中央に位する所から、その名が山塊の名に冠せられてゐるのである。

この山地は母體の關東山地とおなじく四方斷層によつてたち切られた地殼の一片卽ちブロックが、多年風雨流水の浸蝕をかうむつて表面に起伏凸凹を生じたものに過ぎないから、敢てこれを山塊と稱するのである。

丹澤山塊は成因上標高一二〇〇メートル乃至一七〇〇メートルの一の隆起台地と見なすべきもので、この台地を河内川(酒匂川の一大支流)中津川(相模川一支流)等の本支谷が深く台地の根元までも浸蝕し深山幽谷をなすに至つたのである。

山塊中の最高點は丹澤山ではなく、その西北の山つゞきである蛭ヶ嶽(標高一六七五メートル)である。

蛭ヶ嶽、丹澤山、塔ヶ嶽等の高峰は今なほその山頂がなだらかな盆をふせたやうな

形ちを呈して、隆起以前の台地の面影をしのばしむるに足るものがある。

震源地としての丹澤山はこの山塊中の一高峰たる狹義の丹澤山を指すのではなく、丹澤山塊の全體を指すのである。

この山塊の中央部には廣さ一萬二千町歩にわたる御料林があつて、これに丹澤御料地及び丹澤世傳御料地の名稱がつけられてゐるのも同樣の意味合である。

世間には丹澤山を火山であるかの樣に思つてゐる人が少からずある樣であるが、火山に全く緣故がないでもないけれどこれを火山とするのは全然誤つてゐる。

然らばどんな地層からなつてゐるかといふにその大部分は御坂層と稱する水成の地層からなつてをり、中部以西には石英閃綠岩と稱する火成岩が出てゐる。

御坂層は第三紀の中ごろに或海底火山が噴出した大小の火山岩片と、こまかい火山灰とが一緒に水底でかたまつて出來た凝灰岩と稱する水成岩を主岩とし、その間に青灰色の堅い安山岩の層盤がはさまつてゐる地層である。

この層は丹澤山塊から道志山塊につゞき、更に延びて御山坂脈と毛無山脈を作り、

富士山の東北西の三方を取巻いてゐる。

石英閃綠岩はこの御坂層の地層をつき破つて地球内部から噴き出した火成岩で、花崗石に似てやゝ黑味を帶んだ岩である。

初めは上に御坂層の凝灰岩を被つてゐたのであるが、今は上皮の凝灰岩が水蝕作用で取除かれて地表に出てゐるのである。

なほ丹澤山塊の地質について見のがすべからざることは、山一面に新しい火山灰を被つてゐることで、山の傾斜の緩い所では火山灰の層は厚さ一丈餘に及んでゐる。

この火山灰は恐らく富士山から噴出したもので、大部分は有史以前における數十回の破裂にともなつて漸次に降り積つたものであることは、火山灰層が色や大きさの異なつた灰で立派に層をなしてゐることで分かる。

これ等の灰は皆多少分解して赤褐色をなしてをり、東京附近の赤土によく似た所がある。

しかし赤土を作つた火山灰よりも粒が粗いだけに、ざら〳〵してゐて分解も赤土ほど進んでゐないから、赤土程のねばり氣がなく、まことにこはれやすい狀態になつてゐる。云々

石垣山

早川驛の西北二十町

太閤一夜城址のある所である。

石橋山

早川驛の南十五町

山麓より頂上迄十二町、源頼朝の古戰場として有名な所で、山上よりの眺望は頗るよい。一度は杖曳くべき所ぞかし。

東鑑石橋山の戰を敍して云ふ。

『治承四年八月二十三日、武衛相(頼朝)北條殿父子、盛長茂光實平以下三百騎を

率ひて石橋山に陣し、令旨を以て御旗上をなす。こゝに大庭俣野以下平家被官の輩、三千騎の精兵を率ひて石橋山の邊にあり。兩陣の間は一谷を隔つるのみ。また伊東祐親法師三百騎を率ひて武衛陣の後山に宿し襲ひ奉らんとす。三浦の輩は曉天に及ぶより丸子河の邊に宿して、大庭黨類の家屋を燒く。その煙半天に聳ゆ已にして大庭等の群議なり、强兵數千を以て武衛の陣を襲攻し、佐那田余一義忠幷に郎徒豐三家康等命を殞す。曉天に至りて武衛山の中に逃る。時に疾風心を濟まし、暴風身をつからすと。

十國峠

熱海溫泉滯在中の散步地として好適である。熱海から日金山(十國峠)十州一覽臺をへて鞍掛峠をこえて箱根蘆ノ湖畔へ約五里。難路なく、女子供でも愉快に步くことが出來る。

日金山(十國峠)は海拔二千五百五十六尺、熱海町字熱海より頂上迄一里十八町絕頂を丸山又は十國峠とも云ふ。十國の名が示すが如く、山頂よりの風光は絕佳である。

熱海よりゆくには、來宮神社の左側より登る。崎嶇たる石徑を登ること十町、數基の石浮屠がある。之を四面塔と云ひ空海の法嗣眞然の住せし所と云ひ傳へてゐる。こゝより右折して登る。登ること十一町戸澤地藏堂(今は荒廢してゐる)がある。こゝより更らに草山を登ること三十餘町に日金山東光寺と云ふ古刹がある。仁德帝の御宇松葉仙人の開創で、源家將軍源頼朝の中興である。今安置する地藏尊は貞享中、磐若院の僧聖算の造りしもの、其左右に立つ掌善掌惡の二童子は空海の作と云ひつたへられてゐる。こゝより八町にして、十國峠の頂上へ出る。

當面芙容似並肩　天風吹落日全巔
掌中庵菓雙眸裡　照破十州五島眠　島地默雷

箱根山

小田原で下車、小田原驛から湯本をへて強羅迄電車の便がある（一時間三十分、八十錢）強羅から上強羅迄ケーブルカーの便がある（十分、二十五錢）山中、諸溫泉の間は自動車で連絡することが出來る。

箱根山は、複式火山で、金時山、明神山、明星ヶ岳、淺間山、鷹巣山、要害山、鞍掛山、山伏峠、三國山、湖尻山、乙女峠などを外輪山とし（外輪山なるがゆえに内側は急傾斜外側はユルイ裾野をなしてゐる）其中に、神山、駒ヶ岳、双子山等の火口丘が聳えてゐる。山上にある蘆ノ湖は火口原湖で、早川須雲川の二流は火口瀬である。噴火の余勢は今日猶大涌谷、小涌谷に於いてみることが出來る。箱根七湯の名はつとに其名あらはれてゐたが、今は十二湯となつてゐる。春の櫻、秋の紅葉は、特によい。山中の溫泉を根じろとして、山登りも面白い。箱根と云へば、スグに物價が高いと思ふが

夫れは誤解であつて、やり方次第で廉くあがるのである。

湯本（海拔三百四十三尺）◉泉質　單純泉　◉溫泉旅館　福住（デ湯本二）小川（デ湯本一八）住吉（デ湯本六）●古蹟名所（い）白地藏　高さ六尺の座像にして弘法大師の作なり。福住橋前の道路を東方凡そ三、四丁行くと山手の中腹にあり。（ろ）玉簾の瀧　湯本の西方須雲川の上流にあり、夏期入園料十錢冬期五錢（は）小田原電氣鐵道會社發電所、前記玉簾の瀧の西方にあり（に）早雲寺　北條氏綱の開基にして北條氏五世墳墓の地とす、湯本本宿の東舊東海道の北側にあり。寶物見料一人十錢（ほ）正眼寺　舊東海道筋なる古の茶屋にあり、寺内に曾我堂ありて曾我兄弟の木像二體を本堂に安置す、大正三年中曾我堂改築せられ木像を移せり。

塔の澤（海拔四百二十五尺）◉泉質　鹽類泉　溫泉旅館　新玉の湯（デ湯本五）◉鈴木（デ湯本三）一の湯（デ湯本八）福住樓（デ湯本四）●古蹟名所（い）阿彌陀寺、往昔西天竺の阿育大王より分布したる佛舍利を安置したる古刹にして塔の峯にあり（ろ）霧瀧、大倉氏別莊の裏早川の對岸にあり（は）横濱水力電氣會社發電所、此地の

北端早用の對岸にあり。

宮の下（海拔千百二十三尺）◉泉質　鹽類泉　◉溫泉旅館　奈良屋（デ宮ノ下四、三三）　富士屋ホテル（デ宮ノ下二）　龍雲館（デ宮ノ下三十五）　●古蹟名所　淺間山、風光絶佳の地にして山海の兩美を一眸の中に收め眼界濶大遠光近景繪の如し奈良屋の筋向なる島寫眞店と巡査駐在所との間を登り行くべし　（ろ）御用邸　明治二十八年の落成にして同年より　皇女富美宮泰宮兩殿下行啓あらせられしが近年は年々　東宮殿下行啓あらせらる。

堂ケ島（海拔七百九十尺）◉泉質　單純泉　◉溫泉旅館　近江屋（デ宮ノ下十二）　大和屋（デ宮ノ下十一）　●古蹟名所　（い）夢想國師閑居跡　昔足利直義の師事せし國師の閑居せし處にて旅館大和屋の西隣りにあり　（ろ）白絲の瀧　此地の東北の斷崖にあり　（は）調の瀧　宮ノ下への登り口にあり、今は別莊内にあれども外より見る事を得べし　（に）葉蔭の瀧　龍雲館の前にあり。

底倉（海拔千百六十九尺）◉泉質　鹽類泉　◉溫泉旅館　蔦屋（デ宮ノ下六）　梅屋（デ宮ノ下九）　仙石屋（デ宮ノ下二二）　●古蹟名所　（い）太閤石風呂　天正年間小田原の役に豐太閤此地に石風呂を築き將

卒の戰勞を休め且つ創傷を癒したりと云ふ、石風呂は先年流水の爲め蛇骨川の河身に落ちたれども仙石屋の前より西へ半丁程進みたる處の項上より之を望む事を得べし　（ろ）新田義隆朝臣の碑　仙石屋の構内にあり　（は）蔦屋高山園　つたやの南側に登り口あり。

木賀（海拔千〇七十尺）◉泉質　鹽類泉　◉溫泉旅館　三松亭（デ宮ノ下二三）　龜屋（デ宮ノ下二九）　宮内（デ宮ノ下一六）　●古蹟名所　（い）白鷺の瀧　底倉より來る途中の右側にあり　（ろ）佛國將軍ルポン氏の碑、亀屋の庭前にあり、將軍は四十除年前我國の陸軍教官たりし人にて常に箱根の風光を愛し屢龜屋に遊べり、其後歸國せしが、先席崩御の節御大葬に列せんか爲め遙々渡來し再び此地を訪へる際住民は此事蹟を不朽に傳へんが爲め大正二年五月建碑せり。

强羅（海拔二千六百尺）◉泉質　鹽類性硫黄泉　◉溫泉旅館　强羅館（デ宮ノ下十四）　●名所古蹟　强羅遊園地、小田原電氣鐵道會社の經營にして面積三十七萬餘坪其中央に和洋式の一大遊園地を作り其中に音樂堂、動物園、水泳場、倶樂部、兒童遊戯等の娯樂機關を設け其周圍の地十餘萬坪を別莊地とし世人の希望に應じ賣却又は貸與す。

小湧谷（海拔二千尺）◉泉質　酸性泉　◉溫泉旅館　三河旅ホテル（デ

宮ノ下五）開花亭ホテル（デ宮ノ下八）●古蹟名所（い）千すじの瀧三河屋ホテルより二三丁東南の方、蛇骨川の上流の涯にあり、（ろ）笛塚　往昔新羅三郎義光が伶人豊原時秋に笛の秘曲を傳へし舊跡なり、（は）鷹ノ巣山、天正年間北條氏此山に出城を置きたる古蹟なり。

蘆ノ湯（海拔二千六百六十尺）◉泉質　硫黄泉　◉溫泉旅館　松坂屋（デ宮ノ下七）紀ノ屋國（デ宮ノ下三）●古蹟名所（い）飛龍の瀧　芦の湯と舊東海道畑宿との間道瀧坂と云ふ處にあり、（ろ）龍頭の瀧、芦の湯の東の入口より少しく南に下りたる處にあり、（は）二子山養壽園、眺望絶佳の地として芦の湯より元箱根に趣く國道の左側に登り口あり。

湯の花澤（海拔三千三百尺）◉泉質　硫黄泉　此地近來は旅館なきも芦の湯より八丁、小湧谷より近道十四丁なれば此兩地に滞在して湯治を爲すも可なり　但泉質激烈なれば能く入浴方法を心得たる上入浴せらるべし。

姥子（海拔二千八百七十七尺）◉泉質　鹽類泉　◉溫泉旅館　西村（秀明館）

仙石　◉上湯　◉下湯　◉泉質　酸性泉　◉溫泉旅館　前記各所に一軒の溫泉旅館あり　◉仙石元湯　◉泉質　酸性泉　◉溫泉旅館　俵石閣　◉俵石　泉質　酸性泉　◉溫泉旅館　俵石閣（箱根遊覽案内より）

神山、駒ヶ岳、双子山へ登るには、蘆ノ湯か小涌谷を根據とするがよい。外輪山の突破は、

（1）仙石から乙女峠をこえて御殿場へ出る。

（2）宮城野から明神山をこえて道了權現に詣でゝ坂田へ出る。

（3）湖尻峠をこえて裾野に出る。蘆ノ湖畔から鞍掛峠をこえて十國峠に出で熱海か湯ヶ原へ下る。

又、小涌谷から鷹ノ巣山、城山、湯坂山道をへて湯本へ出るも面白い。僅か一里半の道で女子供にもゆける。（この道は箱根の古道）

山中主なる名所は、

大平臺

●古蹟名所　(い)姫の水　有名の清水にして北條家の姫達此水を汲み化粧水に用ひたりと云ふ　(ろ)富士見亭　清洒なる茶亭にして富士山頂を望むを以て此名あり。

元箱根

◉旅館　松坂屋支店(デ箱根三)　橋本屋　武藏屋　●古蹟名所　(い)曾我兄弟墳墓　(ろ)二十五菩薩　弘法大師の作なり　(は)多田滿仲墓　(に)精進ヶ池鱗魚類の絶へてなきを以て此名あり　(ほ)石地藏　弘法大師の作なり　(へ)御狀石　昔源頼朝卿山中遊歴の時此石上にて書狀を披見せるを以て此名あり。(以上の古蹟名所は芦の湯と元箱根との國道との間にあり)(と)箱根神社(箱根權現)祭神三座卽ち瓊々杵尊彦火々出見尊及木花開耶姫尊を祀れる所にして往昔は關東の總鎭守たり芦の湯の東方より來りて湖畔渡船場の前に出て右へ湖邊に添ふて行く事約四、五丁にして達す。

箱根町

(海拔二千三百八十尺)　◉旅館　箱根ホテルはふや(デ箱根三)　遠州屋(デ箱根七)　石内(デ箱根五)　●古蹟名所　(い)塔ヶ島離宮　(ろ)關所舊蹟(以上の古蹟名所は元箱根と箱根町との間にあり)

大湧谷

箱根噴火山の名殘りにして冠ヶ嶽の北崖の中腹に起り東北に流れ早川に入る處の一大澗谷の總稱にして處々に硫黄湧出で又硫烟昇騰して凄慘を極む。　(箱根案内より)

箱根火山中の主なる山について記述しておく。

(イ)　神山

海拔四千七百十尺、箱根諸山中の最高峰で眺望も頗るよい。湯ノ花澤の北方から登る。約一時間で山頂に達する。

名勝地誌云ふ

神山は標高四千七百四十八尺を有し、函根火山中の最高峰なり。而して大湧谷よりのぼる路あり。今その登路を説明せんに、まづ大地獄の道より二の平村を經、湯の花澤を過ぎ、屈曲せる山徑を登り、小湧谷に歸へるを可とす、上り健脚者二時間半なり故に山頂の休憩と下路とを加へて五時間を要す、行路極めて嶮峻、婦人の登躋に適せず、初め長草次に荊棘の間を衝き、舊火口を過ぎ山頂に達す、眺望絶佳、近傍に冠た

り、富士山北西に聳ゆ、右に甲斐の白雪皚々たる峯嶽併列し、左に信濃の連山、足高山、駿河灣の碧色、其海濱に打寄する白波、清水灣、三保松原の松樹亂立せる砂線、更に天城山脈の連亘せる伊豆半島、熱海海上の初島、伊豆七島中なる大島の噴煙、新島等を望み、小田原市街、相模灣、酒勾川、江の島、三崎を越えて、安房湖の崎を下瞰す、箱根山彙は悉く脚下に攢集し、其南方の叢生せるものは駒嶽、其後方なるものは二子山、長壁の如く併列せるものは太閤山、石垣山なり、宮の下は南方に見ゆ、此山彙と富士山との間に馳騁せる山脈の三低處は、御尉峠、長尾峠、ふから峠なり、實に一大パノラマの觀あり。

（ロ）駒ケ岳

海拔四千三百七十尺、蘆ノ湯と湯の花澤との間から登る。山頂迄三十町、全山草山で高山植物に富んでゐる。登路平易である。山頂の廣場は園遊會場としても又高山野球をたのしむには屈强の場所である。下りは多田滿仲の墓のある箱根道めがけて一散にかけおりるも興深きものがある。こゝへ登るには蘆ノ湯へ泊まるをよしとする。

「その地勢は海面より高きこと約二千七百六十尺にして、駒ケ嶽の東麓二子山の北に位し、東北はやゝ開けたれども、西南には峰巒集り、硫黄山、死出の山、火ともし山等その裾に起伏す。硫黄山は蘆の湯を距ること十三町ばかりのところに位し、土塊多く硫黄の氣を含み、岩間に於て自然と燃上り硫氣は再び地中に入る。蓋し芦の湯の泉源たるべし。その北四五町のところに湯の花澤あり。これ近年開かれたる溫泉にして旅舍一戸あり。且つ湯の花を採つて乾燥し、四方に販賣す。

駒ケ嶽　標高約千三百五十米突、また函根火山群中の雄たり。芦の湯より登臨すべし。今その道順を記さんに、まづ蘆の湯より八町、精進ヶ沼に沿ひ、右の山裾を折れてのぼる。半腹より路漸く險なり。頂上にいたるまで二時間を要すべし。山上ひろく尖鋭ならず。草深けれど林は稀なり。神山聳立せるが爲め遠望甚だ佳ならざれ

ども、蘆の湯の半面及び富士山、甲斐、白嶺天守山脈等を望み、二子山の如きは眼下に二重圓錐を低立し、伊豆の諸島を瞰下し得べし。山嶺二箇の噴火口址あり。一は北方に長徑百尺、短徑これに半する卵形を爲し、深さ四尺あり、その南方に長徑八十尺、短徑三十五尺の楕圓形を爲し、深さ三尺を有す。共に近代噴出したる岩塊及び火山礫を以て蔽ひ、地荒びて草木を生ぜず、四周に玄武岩を顯はす。蘆の湯方面よりのぼり、始終湖水を下瞰して、函根權現側に下るをよしとす。(小島烏水氏による)

(八) 二子山

海拔三千五百九十七尺、蘆ノ湯より頂上迄約三十分程で上二子の山頂に達する。頂上附近には野火が亂發してさながら庭園の如くである。夫れより十五分にして下二子に達する。上二子は蘆ノ湖を下瞰し下二子は、喬木灌木に圍繞せられてゐて風光は上二子に劣る。二峰をつなぐ小谷地が噴火口である。

ほとゝぎす又子規二子山　三千風
稲妻のいそがしふりや二子山　柳居

(九) 鞍掛山

海拔三千二百尺、箱根町より道を熱海に採り山頂迄約一里、眺望頗るよい。この山は豆相兩國に跨つてゐる。

(十) 箱根嶺 (函嶺山)

豆相兩國に跨り海拔二千八百二十二尺、近世東海道の驛路こゝを通り交通上の大動脈であつた。三島町へ三里九町、小田原町、四里三十一町、

箱根山麓の里に宿とへば
暮ぬといそぐ嶺の旅人　烏家

（ヘ）長尾峠

箱根より御殿場に通ずる要路で、約百間のトンネルをうがち之を出れば富士の裾野を大觀し風光雄大である。約三里にして御殿場に達する。自動車の便がある。

（ト）乙女峠

海拔三千二百六十七尺、仙石原村より山頂迄約二十七町、富士の裾野を大觀し風光頗るよい。山頂より御殿場迄約二里。

（チ）金時山

猪鼻岳（公時山）とも云はれ、海拔四千三尺、仙石原より二十五町。附近の山は草山だがこの山の頂上丈けは、木がこんもりとしてゐる。坂田金時居住の傳說が

あり、毎年陰曆三月十七日に山頂で猪鼻祭りを行つてゐる。北海道アイヌの熊祭りの如きものである。

乙女峠からも足柄峠からもゆくことが出來る。

七湯の枝折に『公時山、此山はむかし、攝津守賴光、奥州の任はてゝ上洛の折から足柄山に至り玉ふに、麓のあなたに、雲氣の立を見たまひ綱に命じて、彼所をさがし求めしめ玉ふに、老軀と童形とを得たり、則具して參れり、賴光旅の破子召寄て、主從の約をなし玉ふに、綱、扇もて拍子にて美玉斯にあり、匱におさめて藏したり、よき買を求めて沽諸、今よきあたひを求めたり、公に事ふまつるに、時を得たりと祝しければ、太守殊によろこび給ひ、誠に公につかふまつるに時をえたれば、其名を公時と名乘るべしとなり、以上前太平記に委し、其時雲氣の立て所にて右公時の出たる山なれば後人いつとなく呼びならはしけるとぞ』とあり、又新編相模風土記には『猪鼻嶽或は公時山とも云、往昔源賴光の臣坂田公

時が出でし山なりと傳ふ、山上に公時踏破り石と云あり、又、山麓に彼が蹶落せしと云石あり石上に公時の祠を置』とある、其他公時の事蹟は唱歌に俗歌に人口に膾炙し居るが、公時が山姥に育てられたりと云ふ説より考ふれば近隣の姥子の地名の起因と何等かの關係あるにあらずやと思はれる。

(リ) 足柄の碓氷峠

足柄の碓氷峠は、金時山からもゆけるが、順路は仙石元湯から俵石に出でゝ登る道である。日本武尊が東征の歸途『吾嬬はや』と宣ひし地である。底倉高山園がたてた『吾嬬はや』の碑がある。元來日本武尊が『吾嬬はや』と宣ひし地は書紀には上野國碓氷峠とし、古事記は相模の坂本坂としてあるが、正しくはこの足柄の碓氷峠である。

(ヌ)明神岳

海拔三千八百四十五尺、別稱は狩野山、塚原山。宮城野より頂上迄三十三町。山上に明神の社がある。これ山名の起りし所以である。

(ル) 明星ヶ岳

海拔三千五十三尺、堂ヶ島より登るをよしとする。山岳志云ふ。

まづ堂島より溪流を渡り、右折して左折し、一時間半にしてその山頂に達す。眺望壯豁、富士山の直前なる山脈の低所は御尉峠にして、右に金時山、明神嶽、後に大山酒匂川の平原と趣えて、連續せる丘陵を見る。更に其間を見れば、小田原市街、大島を浮べたる太平洋、その右に石垣山、二子山、駒ヶ嶽、神山、臺嶽を望む。神山より白煙蒸騰するものは、早雲地獄の硫氣孔なり。それより遙か青空に聳立するは足高山なり。か

くの如き眺望は日出日没の際を以て、早朝若しくは夜中の行路を取らざる可からず。故に提灯を用意す可し。歸路宮城野より木賀に入れば前路より嶮なり。この登山は軟弱者及び炎天には勸告する能はず。山中に休憩する時間を加へ三時間半にして足れり。

（ヲ） 箱根一泊探勝案

（第一日） 午前中に小田原驛に着車の場合は電車に乘り代へて （い）小湧谷驛に下車し、（自動車貸切又は乘合）又は徒歩にて芦の湖畔に赴き、湖水を渡船又は湖岸を歩み湖尻姥子大湧谷を越へて早雲山下より索條電車に乘りて強羅に降り、自働車又は徒歩にて底倉に下り、若くは電車にて宮の下驛に着きて、蔦屋に宿る、これを順廻りと稱す。（ろ）強羅驛に下車し先づ公園を見物して索條電車にて早雲山麓に登り、徒歩又は山駕籠にて大△谷姥千をへて渡船又は湖岸を歩み箱根町又は元箱根につき徒歩又は自働車（貸切又は乘合）にて小湧谷に下り、そのまゝ底倉へ來るか、小湧谷より宮の下驛まで電車に乘るかして蔦屋に宿る、これを逆廻りと云ふ。（は）宮の下驛に下車し一旦蔦

屋に立寄りて一浴を試み英氣を養ひ前記の順廻り又は逆廻りをして歸着蔦屋に宿る

（第二日） 午後に小田原驛に着車の場合には電車を宮の下驛にて降り又自働車にて底倉に來り其夜は蔦屋に宿り翌日順廻り又は逆廻りをなし再び蔦屋に立寄るか其まま電車（強羅又は小湧谷驛より）又は自働車にて小田原驛に至りて歸途に着く更に芦の湖畔より舊街道を下りて湯本に出づる道順もあり。

道了山 （道了權現）

松田驛から關本迄乘合自動車の便がある。（五十錢） 關本から麓迄半里、麓から大雄山最乘寺迄二十八町。

小田原から三里 （俥賃三圓）

最乘寺は、應永元年草創の古刹である。（曹洞宗）本堂開山堂共に壯麗をきはめてをる。寺では御コモリ料を徵して希望の人を泊めてゐる。本堂左方觀音堂の結

果門を入り、右手の石階を登つた所に道了薩陀殿がある。この道了さんが信仰の的となり、最乘寺の名を知らぬ人があつても道了の名は知らぬ人がない程になつてゐる。古來嚴重な掟をまうけて伐木を禁止してゐたので、一山樹木鬱々としてゐる。

道了は開山了庵禪師の徒弟で大力無双の勇士であつた。最乘寺草創の日に當り自ら大木巨石を運んで之をたすけ、應永十八年三月了庵入寂の日に忽ち身を天狗とへんじ、永く山門を鎭護すべきを誓つて雲中に飛び去つた。

道了から、明神山をこえて箱根の宮城野へ三里、半日行程である。又山麓より矢倉澤をへて足柄をこえ御殿場へ出るも而白い、これはブラ〳〵と歩いて丁度一日程である。この足柄越は大いにすゝめたい。足柄路については拙著富士と足柄を參照せられたい。

矢倉岳

山北驛で下車し、西南十三町に相模第一の瀑布と云はれる洒水の瀧がある。（大正十二年の震災で稍舊觀を失つた）この瀧を一見して矢倉澤へ出る。（矢倉澤から一里半で足柄峠の絶頂へ達する）矢倉驛から一里にして山頂に達する。海拔二千八百六十一尺。一度は登つてみるもよい。スナホな山で、眺望も相當によい。

足柄峠

御駿場下車。竹之下に出で、こゝより登る。頂上迄一里十四町。街道は大分破壞されたが新道は下駄ばきで歩ける位に立派な道である。草山で水がないから水丈けは充分に用意してゆくことを忘れてはならない。

海拔二千四百六十二尺、往古は山中東海道の官道であつたが（今の古道）延曆二十一年五月箱根路を開いて官道として以來官道の地位を箱根にうばはれたが、し

かも猶、重要な交通路であつた。

新道を登りつめて右に約五六町ゆくと照天樣がある。その傍らに獵師八郎兵衛の家及び新羅三郎義光が豐原時秋に笙の祕曲をさづけたと云ふ笛塚がある。（この遺蹟は箱根にもあるがこの地のが本ものらしい）

足柄路には殆んど樹木なく、照天の社の所に一むらの木立があるばかりである。峠に立つて富士の裾野を大觀した風光は頗るよい。

『足柄關址　北足柄村矢倉澤にありしも、今はその跡定かならず、矢倉驛は古へ足柄往還の一驛にして、その西の峻嶺を足柄峠といふ。昔、新羅三郎義光が奥州下向の折この山中にて豐原秋元に大倉調の祕曲を傳授せしは著名なる物語なり。古來この地に關する詠歌頗る多し、今その一二を採錄せん。萬葉集「安之我良の置佐可におして袖ふらばいはふる妹はさやに見んかも。」後撰集「あしがらの關の山路を行く人は知るも知らぬも疎からぬかな。」賴山陽「鶴鴿原遠月孔明、欲出關門且駐行、應惜平生廣陵散、鐵衣風露夜吹笙。」大沼枕山「秘曲抽傳憐業斷、長途跋涉患車危、笙聲一一寓誠意、恰有青山明月知。」

愛鷹山

裾野驛又は原驛下車。

一名鋸岳とも云はれ海拔四千九百六十六尺。古訓はハシタカである。富士の南麓に特起し、噴火の年代は富士よりも遙かに古い。山頂は

伸次郎、袴、喚、

位牌、大岳、越前

の六峰に分れ中に舊噴火口がある。山の週廻十三里に及んでゐる。山頂の神殿は瓊々杵の尊を祭つたものと云はれてゐる。

此山は古へ牧馬を以てあらはれ、源賴朝は良馬百疋を放つて愛鷹明神を祭り夫

れ以來馬が繁殖した。

原驛で下車して人力車で坂下に至り、こゝより登る。相當に峻路である。歸りは須山に下り裾野驛もしくは御殿場驛へ出るをよしとする。

初雪や足高山のかしらから　平砂

達摩山

三島で電鐵に乘りかへ大仁でおりて修善寺温泉へゆきこゝから登るのがよい。山は海拔三千二百三十七尺、眺望の絶佳なるを以て知られてゐる。修善寺浴客の好散歩場である。山中に石楠花が多い。頂上から戸田へ下るも面白い。僅かに三十町である。この山は伊豆半島の火山の中では、猫越についで古いのである。天城の噴火は達摩より新らしいのである。

眞城山

猿啼山とも云ひ、戸田より僅か十八町にして山頂に達する。一番面白いのは古宇より登り戸田へ歸る案である。古宇より數町にして山道となり羊齒科植物が繁茂して熱帶的の風土をなし、頗る趣味深きものがある。山頂より駿河灣を大觀する風光は伊豆半島第一と云はれてゐる。戸田に一夏を送る人は一度は是非登つてみなければ豆州の風光を談ずるの資格なしと云はねばならない。

天城山

湯ヶ島温泉（修善寺から三里自働車賃一圓）から（最高峰萬三郎岳）迄三里、天城北麓には、舟原、中島、吉奈、嵯峨澤、湯ヶ島と五溫泉がある。温泉に浴して天城探勝を志すをよしとする。

伊東温泉に遊んだついでに天城の深勝をするも面白い。

天城（尼木ともいふ、古名狩野山）は複雜した火山である。天城の稱は甘木の義である。古來山中より良材を産し、造船の材料となつてゐる。今日猶山中樹木鬱蒼としてゐる。この山に登る口は凡そ四つある。何れも溪流に沿ふて上るのである。狩野口、大見口、河津川、仁科口であつて、多くの人は湯ヶ島より登る。これ卽ち狩野口であつて狩野口の水源に沿ふ。

大見口――大見川の水源に沿うて登る。

河津口――河津川の水源に沿うて登る。

仁科口――仁科川の水源に沿うて登る。

登山者が割合に少ない丈けに、山高からざれ共深山幽谷の趣き深きものがある。一度は杖曳くべき所である。

一、天城火山彙　は田方郡の東南部を占め、賀茂郡に跨り、東は相模灣に沿び伊東に

延び、北は大見、狩野兩川の間に蟠踞する一大火山群にして、種々錯雜せる火山現象此處に簇りて往昔活劇の狀今尙追想するに足るものあり、其最高點萬三郎嶽（一四五〇）は郡の南境に聳ゆ、其東に連る萬三郎嶽（一三〇〇米）と共に中央火口の外輪山の一部をなす、此の二峯を連ぬる連峯は彎曲して弧狀を呈し更に東南に延びて箒木山（一〇二八米）に迨び、次第に低夷して白田川の火口瀨に盡く、萬二郎嶽より、西はカヅゴ平、八丁池の二側火口の爲に山形稍明ならざれども猶彎曲して東方と相應しつゝ南方賀茂郡なる三筋山に達す、以上は天城火山の火口壁にして賀茂郡の東北を流るゝ白田川は實に其火口瀨なりとす、火口の直徑大凡六千四百米其內壁は極めて急峻なりと雖本郡に向へる外側は極めて緩く、裾野は西方に於ては猫越火山の妨くる所となり發達するを得ざりしも他の三方に於ては著しく、殊に北側は大見地方に廣がり樹木鬱蒼たる天城森林をなせり。

天城火山の山側には數多の側火山を生じ總數十五其中田方郡に屬するもの十一あり

第一次側火山

遠笠山	萬二郎岳の東北	一一九七米
カワゴ平	萬三郎嶽の西方	一一〇〇米
八丁池	カワゴ平の西南凡一哩半	一一三五米
第二次側火山		
丸野山	上大見村字菅引	六九六米
岩の山	菅引と對島村池との中央	六一一米
孔の山	岩の山の南	六〇〇米
矢筈山	對島村字池區	八一〇米
松堂山	同　八幡野區	四五九米
鉢窪山	上狩野村湯ヶ島	六七四米
廓外側火孔		
小堂山	小玉村川原	三二一米
大室山	對島村池	五八一米

第一次側火山は中央火口の北邊に接近して生じ何れも千米以上の高さを有し外輪山は伯仲の間にあり。

○遠笠山――は天域山の東端に屹立して圓錐狀を呈す其裾野は浩漠にして東、南、北の三面に擴がり北は冷川に及び其谷を隔て箱根熱海山脈と相望み東は第二次側火山東北線に及び南は所謂遠笠野にして赤澤に至りて海に盡く、山頂は甚しく浸蝕を受け今は火口を目擊する能はざれども其斷崖を檢すれば火山の噴出物重積して明に層狀火山たることを知るを得べし、伊原町より往復一日の里程余は兒童を速れて登ること三回。

○カワゴ平火口――萬三郎岳の西方。其西方は深谷を以て限られ口底の直徑百五十米内壁は頗る急斜にして直立す、本火口はもと一大破裂をなし、其噴出せる浮石及黑曜石は北方上大見村地藏堂に向つて流下すること約三千五百米、其流域は巾約二百五十米、上大見村にては現在浮石を石材として東京方面へ出す。

○八丁池火口――カワゴ平の西南凡そ一哩半。東西の直徑凡百五十米、南北二百米、

常に水を湛へ、所謂火口湖をなす。

○鉢窪山)――第二次側火山西南線の最北にある火山にして湯ヶ島の南方約三千米、下田街道の東に沿ひて立つ、美麗なる圓錐形を呈し、其狀宛然畫けるが如く高さ六百七十四米其頂上には火口址鉢狀の窪地を存す、本線は之より賀茂郡に入り登り、尾大池、小池に連續せり。

○丸野山――遠笠山に寄生せる小瀨山、高さ六百九十米、頂上に大火口あり、北に向て潰決し火口瀨を作る。

○岩の山――冷川より池村に至る路傍にあり通路より高きこと數十尺に過ぎずされど火口割合に大にして其左側に玻璃質富士岩の堆積あり岩骨嵯峨として登るべからず

○孔の山――岩の山の南東數丁の處にあり亦噴火口の遺址にして西北冷川より東南八幡野に至る徑路其口底を通過せり。

○矢筈山――池村窪地の西北端にあり其峯分れて大小二峯となる矢筈に似るよりこの名あり、大なるを大矢筈小なるを小矢筈と云ふ、前者は高さ八百十米後者は六百七

十米あり、山勢巍峨急峻にして、一見して他と區別するを得べし其西及北側には合計五個の火口あり、其關係は岩の山に於けると同樣なりとす。

○大室山――完美なる圓錐形を呈し頂上には噴火口址を存し南腹に一側火口を存するの狀富士山の寶永山に於けるが如し又其西北麓に穴の原あり。

○小室山――大室山の東北にあり、海岸に接して起れる圓錐形の小火山にして高三百廿一米、頂上に小火口あり幅員百九十七歩。

富士登山

富士と云ふ語の名義

フジと云ふ言葉の語源に就いては、

(1)富士はアイヌ語にして『火の女神』と云ふ意義である。

(2)吹息穴と云ふ言葉のつゞまりたるもので、嶺の穴より息吹をこれるが故にや(棟梁集)

其他數種の說があるが、太古此邊はアイヌ人のすみかであつたのであるからして、アイヌ語原說が正しいのである。富士附近へはアイヌの後に熊襲族が九州から移住してきて勢力をはつてゐたらしい。其ことは富士淺間、三島の神社等が大山祇命、木花開邪姫を祭つておるに依つても明かである。

富士と噴火

富士は噴火山でありて、有史以來大小三十四回の噴火をくりかへしてゐる。これ起滅無常の山と云はれる所以である。噴火の年代を富岳志により左に列記しておく。

孝安天皇三年 紀元二百七十一年 西暦紀元前三百九十年 二月三日、天地震動、四方晦冥、數月を經て十月三日晴天。駿河國富士山現出。同四十二年、同九十二年、富士山現出すと。富士山大緣起 平安朝承和五年の著 に見ゆ。

孝靈天皇五年 紀元三百七十五年 西暦紀元前二百八十六年 駿河國、富士山湧出し、近江國琵琶湖開くと。

清寧天皇五年 紀元千四百十二年 西四百八十二年 三四月の交、富士山、燒け崩れて灰降りしこと、(伊豆山緣起)に見ゆ。

宣化天皇の御宇に當りて不盡山海中より湧出せりと。（詞林採葉抄に見ゆ）

光仁天皇天應元年（紀元千五百四十一年　西暦七百八十一年）辛酉七月六日駿河國言ふ、富士山灰を雨らし、木葉皆凋萎する、（續日本紀）に見ゆ。

桓武天皇延暦十八年（紀元千四百五十九年　西暦七百九十九年）三月十四日より、十六日に至り、富士山噴火。同十九年庚辰春夏之交、富士山焚け、灰を雨らす響き雷の如し。同二十一年壬申正月富士山焚け砂礫を雨らす霰の如しと。（日本紀略）に見ゆ。

日本後記に云く

延暦十九年三月十四日より、四月十八日に至る、富士山の頂自ら燒け、晝は卽ち燒氣暗冥、夜は則ち火光天を照す、其聲雷の如く、灯の下ること雨の如し、山下の川水皆紅色なり。

桓武天皇卽位元年、駿河國言、富士山雨レ灰、蓋謂不二山土中多二硫黃一嶺常起二焰煙一、遠望如レ縷、有レ時炎火盛熾、則焚二砂石一雨二灰於百里一云。

都良香富士山記に云く

東脚下有二小山一、土俗謂二之新山一、本平地也、延暦二十一年三月、雲霧晦冥十日而後成レ山蓋神造也。是年不二一の燒石に塞がれたる足柄路を廢して、新たに筥荷の途を開きしこと、（日本後紀）に見ゆ。

淳和天皇天長三年（紀元千四百八十六年　西暦八百二十六年）富士山噴火

清和天皇貞觀六年（紀元千五百二十四年　西暦八百六十四年）甲申五月駿河國言ふす淺間大神の大山焚く同七月十五日甲斐言ふす、山焚け石流れ、八代郡本栖并て剗西水海を埋め、火焰赴ひて河口海に向ふと、三代實錄に見ゆ。同十二年富士山噴火。

又別記に云、清和天皇貞觀六甲申年五月富士山西の峰に熾火ありしか、遂に一大劇響と共に再ひ大噴火を來せり、これより白河天皇永保三癸亥年十月に至るまで六噴火ありて、竟に消火となりぬ、所謂富士八流是なり。

朱雀天皇承平七年（紀元千五百九十七年　西暦九百三十七年）丁酉十一月、甲斐言ふす、富士山焚くと、

（日本紀略）に見ゆ

三代實錄曰

貞觀六年六月十七日辛丑、下二五畿七道諸國一、班二幣境內一、大小諸神爲二穀祈一也。

甲斐國言、駿河富士山忽有二暴火一、燒碎二山岡一、變二草木一、焦熱二土礫一、石流埋二八代郡本栖并兩水一、海熱如レ湯、魚鼈皆死、百姓居宅與レ海共埋。或有レ宅無レ人數難レ記、兩海以來、亦有二水海一、名曰二河口海一、災焰赴向二河口海一、本栖剗海等未二燒埋一之前、地大震動、雷電暴雨、雲霧晦冥、山野難レ辨、然有二此災異一焉。

貞觀七年十二日九日丙辰、

勅二甲斐國八代郡一、立二淺間明神祠一、列二於官社一、卽置二祝禰一、宜二隨レ時致レ祭。先レ是彼國司言、往年八代郡、暴風大雨、雷電地震、雲霧晦冥、難レ辨二山野一、駿河小富士大山西峰忽有二熾火一、燒碎二巖石一、今年八代郡擬二大領無位伴直眞一、直爲二祝司一。群人伴眞、直爲二祝司一。群人伴秋吉爲二禰宜一。群家以南、作二建神宮一、且令レ鎭云。

村上天皇天曆六年（紀元千六百十二年）西曆九百九十三年富士山噴火一條天皇正曆四年（紀元千六百五十三年、西曆九百九十三年）富士山鳴動す。

同　長保元年（紀元千六百五十九年）西曆九百九十九年　富士山噴火

同　長元五年（紀元千六百九十二年）西曆千三十二年　壬申十二月十六日、富士山燒け峰より山脚に至ると。（日本紀略）に見ゆ。

白河天皇永保三年（紀元千七百四十三年）西曆千八十二年　三月廿八日富士山燒け燃ゆと、（扶桑略記）に見ゆ。

後醍醐天皇元弘元年（紀元千九百二十一年）西曆千三百三十一年七月七日、不二山鳴動、山崩ること數百丈と太平記に見ゆ。

後水尾天皇寬永四年（紀元二千二百八十七年）西曆千六百廿七年　丁卯不二山燒け、江戸灰を雨らすこと四日と泰平年表に見ゆ。

東山天皇元祿十三年（紀元二千三百六十年）西曆千七百年　庚申富士火を起すと、（野史纂略）に見ゆ。

同寶永四年　紀元二千三百六十七年　西暦千七百七年　丁亥十一月二十一日、不二山、火山破裂し、寶永山湧出すと、諸書に散見す。同寶永五年閏正月五日、不二山噴火し、駿豆相武に灰を降らす。

仁孝天皇天保六年　紀元二千四百六十五年　西暦千八百三十五年　二月八日、不二山震動し、雪塊飛散す。

孝明天皇安政元年　紀元二千五百四十年　西暦千八百五十四年　十一月四日、富士山鳴動し箱根の方に向ひて崩ると續々太平記に見ゆ。

富士山燒之事

寶永四年丁亥十一月二十日頃より、江府中天氣曇、寒氣甚敷、朦朧たるに。同二十三日午刻時分、いづく共なく震動し、雷鳴頻にで西より南へ墨を塗たる如き黑雲たなびき、雲間より夕陽移りて、物すさまじき氣色成か、程なく黑雲一面に成り、闇夜の如く。晝八時より、鼠色成る灰を降す。江府の諸人、魂を消して惑ふ處に。老人の申けるは、此三十八九年以前斯樣の事有り、是は定めて

信州淺間の燒る灰ならむと云、仍て諸人少心を取直しけるに、段々晩景に至り夜に入るに隨て彌強く降りしきり、後には黑き砂を夕立の如く降來て、終夜震動し、戸障子抔も響き裂恐しさたとへん方なし。總して晝八つ過より、空暗き事夜の如く、物の相色も見え分ねは、悉く家々に燈をとぼし、往來も絶々に、適進行の人は、此の砂に觸れて、目くるめき、怪我抔をせしも有とかや。諸人何の所以を不知は、是なん世の滅するにやと、女童は泣さけぶ處に。翌日富士燒候、御注進有てこそ、偖は其の砂を吹出して如此ならんやと、始て人心地ぞ付たりける。砂降り積る事凡そ七八寸、所に寄り一尺餘も積しとぞ。事畢て砂を掃除すといへども、板屋などは、七八年過候以後迄も風立候折には、砂を屋上より吹落し、難儀いたしける由。亦翌月より春に至り、感咳嗽一般にはやり家々一人も減さす是に惱さる、其節狂歌に。

是やこの行も歸るも風ひきて知るもしらぬも大方は咳

前代未聞の事實也、右の刻駿州富士より注進の趣。

昨二十二日晝八時より、今二十三日迄之間、地震間もなく三十度程ゆり、民家夥敷潰れ申候。扨二十三日晝四時より富士山夥敷なり出、富士郡一面に響渡、男女絶入仕者多候へども、死人は無御座候然處に山上より、煙夥敷卷き出し、山大地共に鳴渡郡中一面に烟渦卷候故、いか樣之譯共不相知、人々十方を失ひ罷在候。晝之内は煙計見相見候處、夜に入候は、一遍に火災に相成候其以後如何樣に成候哉。不奉在尤右燒出し候節、不取敢爲御注進罷越候故。委細の儀は跡より追々可申上候。

右注進の後、彌火氣熾に成、土石石礫を吹飛し、近國二十里四方へ砂石を降せ申候。伊豆相摸駿河は所に寄て貳丈餘も降積り、堂社民屋も埋れ、勿論田畑の荒れ夥敷、日を經て稍々燒鎭ぬ。其大砂を出せし所穴と成、其の空の口に、大なる山を生ず、世俗呼て寶永山と號す。本海道の方より眺むれば、右流の半腹に、彼塊

出來て瘤の如し。三國無双の名山に、此時少き瑕の出來しこそ恨なれ。

富士の山體をめぐりて、寄生火山が澤山にある。其中著名なのは、寶永山、小富士、小御岳の三つである。

富士登山の歴史

古代アイヌ族がこの地方に勢力を占めてゐた頃には、登山は行はれなかつた。アイヌ族は裾野を狩くらすのみで、山上へは、神神恐るべきの境として登らかつた。

富士登山を始めて試みたのは我々日本人の祖先である。富士へ最初に登つたのは人皇四十二代文武天皇御宇の人役小角であつた。其後文安年中、富士上人と云はれる僧末代が修業のため登山して以來修驗の徒が修業のために登るに至つた。

其後天文年間に行者角行がこの山中で修業して以來富士講なるもの起り、富士

の信仰は全く宗教化するに至つた。富士講は今では扶桑教と稱してゐる。

昔は富士は白衣の徒の獨占する所で、一般の人は富士講に加入せざれば登ることが出來なかつた。富士が白衣の徒から開放せられて、男も女も平氣で登りうるやうになつたのは極めて最近のことである。

富士の植物

富士は、植物と小鳥の研究地としては恐らく海内無比であらう。裾野一帶は小鳥の棲息地である。こゝでは富士の植物界について記述しておく。

富嶽の植物は信州邊の山岳に於けるものと大差はないが山勢が正整して居るから高度に關する植物分布の眞相を知るに便利である。而して其植物分布の狀態は判然たる帶觀を呈し五帶に區別せらる。

一山麓帶　主として裾野より成る

二喬木帶　該帶中の下部は主として落葉濶葉樹より成り之に常綠濶葉樹を混す

又其上部は概ね針葉樹の密林にして林中陰暗種々の陰草を生す

三灌木帶　主として矮小灌木より成り之に草本を混す

四草本帶　高山固有の草本を生し岩土に着生す

五地衣帶　主として固着地衣より成り岩石の表面に密着す

以上諸帶の高度殊に喬木帶の如きは不二山の諸側面に於て同一でない。概して北面に於ては遙に高處に達し之に反して東面に於ては己に低處に終る。

不二山は往時に於ける破裂の影響と山上の溪澗に乏しくて水分を缺けるとにより草本帶植物の如きは其數甚だ少なく發生亦佳良ならす故に中央山脈中の諸高峯に普通なる高山草本中不二に缺如するもの少からす又ひまつ。がんかうらん。等の如きも之を同山に見ず。

不二の山上は唯少數の岩生地衣を產するのみにして其中普通なるものは、ちづ

こけ。はひいろごけ。だかねごけ等なり。

◇

不二植物の主要なるもの〻目錄

大宮口

山麓帶（裾野一帶）

をみなへし。をとこへし。ふちばかま。まつむしさう。わらび、かはらなでしこ。ふしぐろせんのう。をぐるま。かうらん。くわ。みしまさいご。すゝき。かや。中には左の深山めきたるものをも交へたり

をたからさう。まるばのちやうりやうさう。あつもりさう。

喬木帶

馬返以上喬木陰森をなし諸種の樹木及北陰濕の地に生する草本及羊齒多し（北邊は大抵諸高山の同帶と同し看をなす）北帶の下部にはもみの木多く段々上へ行けはふじまつの森となる。

灌木帶

一合目以上灌木帶となり山勢も順に急となりみやまはんのき。いはやなぎなどの草本帶も出て來れり。

草木草

二三合目以上は漸次灌木少なく是より七合目邊までは草木帶にして唯矮草のみ播布せり。

六合七合目頃に至れは草本も段々なくなりて此邊に在るものはをんたで最多し。

いはすげ。こたぬきらん。わうき。いはわうき。いはつめくさ等。

地衣帶　最頂端の植物帶なり八合目以上は地表帶も殆んど盡きたり。

須走口

草木帶

いわつめくさ。いはひけ。ふじはたざほ。わうき。いはわうき。おんたで。こたぬきらん。みやまをとこよもき。

むらさきもめんづる。しほがまきく。あきのきりんさう。ほたるぶくろ。ふじあさみ。

又みやまはんのき。みやまなゝかなどありて段々と灌木帶に移り行く愈下りて大小屋に至れは已に喬木陰草苔となる是より馬返迄の間一二里間は樹木欝茂し地衣蘚の類より羊齒其他陰草類甚多く實以て植物の好採地なり。

吉田口

山麓帶（裾野中央海拔一二〇〇米突）

やまぶたう。しゝうこと。もりあざみ。をとこよもぎ。よもぎ。はぎ。まつむしさう。いぶきばうふう。こおにゆり。たちふうろ。きんみづひき。たかとうだい。れんげつゝじ等。

山麓帶（上部海拔一五〇〇米突）

からまつ。かはらなてしこ。ともえさう。こまつなぎ。なんてんはぎ。あれからまつ。くるまばな。をかとらのを。つりかねにんじん。をみなへし。かはらまつば。ぎしぎし。のあざみ。さはひよどり。かうぞりな。かせんさう。たうひれん。しらやまぎく。とだしは。すゝき等。

八月中旬より九月上旬頃までは是等の草花滿開し殊にいぶきばうふう。（白花）まつむしさう（紫花）、はぎ（紅花）、をみなへし（黃花）の類は數多發生して一齊に開花し高山の風光頗る美麗なり。

喬木帶

（海拔一五六米突）即ち裾野の上端よりつゞく該帶中の低處には主として落葉濶葉樹を產し之に常綠樹を混生す。

こばのとねりこ。ひやまやなぎ。いぬこりやなぎ。やまならし。ぶな。みづなら。さらさどうだん。ときはかへで。はうちはかへで。うりはだかへで。みづき。まめざくら。ずみ。かまつか。いぬゑんじゆ。みつばあけび。さるなし。

またゝび。つるうめもどき。まさき。くろもじ。だんかうはい。みやまいぼた
等。

又樹下の地面には左の陰草を産す

みやこざゝ。いぬやまはつか。ふじてんえんさう。しもつけ。やましろぎく。
ひとりはな。

喬木帶

北邊には多くの松柏科植物を生し密林を形つくる殊に不二の北面に在りては該森林は頗る高處海抜(二二〇〇米突)に達し山腹を被ふ該森林中の主たるものは

たうひ。うらじろもみ。しらびそ。はりもみ。いらもみ。うりはだかへで。
だけもみ。さるをがせ。

同上部(海抜一七〇〇米突密林中の陰草)

そばな。やましろぎく。ひごをみなへし。きけんしようま。いぬやまはつか。

ひめのがりやす。やまねこやなぎ。やぶひようたんぼゝ。みつばつゝじ。ばい
くわうつぎ。等

同上部(海抜一七五〇米突濶葉樹并針葉樹の山林)

むしかり。なゝかまど。ほつゝじ。にしきうつぎ。はりもみ。いらもみ。だけ
もみ。等

草本帶(海抜二〇〇〇米突須走口)

ふじあざみ。いたどり。めいげつさう。いはわうき。やまはゝこ。くさぼたん
はくさんをみなへし。かりやすもどき。よもぎ(以上砂生)つのこけ。

富士は公園

富士は年々登山者増加し、七月の末から八月十日頃迄には行列をして登るやうな盛況を呈する。山中の設備は完全してゐるからして、大した支度に不要である。

強力を雇はずとも樂に登れる。

雜沓をさけて、ホントに富岳の神祕を味はふには八月中旬から下旬へかけての所謂『秋の山』をえらぶがよい。この季節は、氣候がかはり易いが、麓で天候を調べてゆけば心配はない。今では富士は一種の公園である。日比谷公園の散歩と何らかはる所はない。余は山頂で、前後七回に亘つて野球諧曲大會を催うして、成功をおさめたことがある。

ゴザやワラジや金剛杖を始め登山に必要なものは、登山口で賣つてゐる。登山にはワラジが一番いゝが、下駄でも大した困難はない。余は前後廿五回登山して、ゐるがいつも下駄ばきである。下駄一足で十分である。ワラジをはきつけぬ婦人には麻裏草履がよい。

登り口

登山口は五つある。

駿河
- 大宮——口東海道線富士驛で下車、富士身延鐵道にのりかへ大宮で下車。
- 須山口——東海道線裾野驛より三里。
- 御殿場口——東海道線御殿場驛下車。
- 須走口——御殿場より二里半、自働車及び馬車の便がある。

甲斐　吉田口——中央線大月驛で下車電車にて吉田に至る。

中道廻り捷徑

小御岳口、人穴

けれ共八合目以上では、三道となる。吉田と須走道は八合で、御殿場と須山道とに三合目で合するからである。

富士山の異名

海内屈指の名山であるからして澤山の異名がある。

不二山、布士山、不盡山、不時山、藤岳根、鳴澤高、常盤山、二十山、塵山、三重山、新山、見出山、三上山、神路山、羽衣山、乙女子山、東山、竹取山、國深山、鳥子山、芙蓉峯、八葉岳、和合山、御影山、影向山、仙人山、七寶山、四面山、養老山、妙高山、吹風山、戀の中山、高師山、時不知山、四季鳴山、

ふじの根に登りてみれば天地はまたいくほどもわかれざりけり　長流

元日の見るものにせん富士の山　宗鑑

不二を見ぬ歌人もあらん花の山　嵐雪

大宮口

表口と云ひ、吉田と共に五道中最も早く開けたのである。この方面は噴火の災害にあひしこと極めて稀れであつた爲め、山容の壯嚴と優美なこと、森林帶の完全せることに於いては五口中第一である。大宮町附近には人穴(四里)白糸瀧(三里)本門寺(三里)曾我兄弟墓(一里半)等みるべき名所が多い。大宮町から上井出迄鐵道馬車でゆくと、こゝを中心として白糸瀧、建文年間富士卷狩の時の狩宿(駒止櫻)曾我神社等を巡覽することが出來る。

大宮町から山頂迄五里二十八町四十五間、内六合目迄は乘馬の便がある。登山者は官幣大社の淺間神社に詣うでゝから登る。裾野道は緩傾斜で歩いてみて實に氣持がよい。萬野すぎ一里半にして山宮に達する。夫れからカケスバタで少し傾斜を強めて一合目につく。ここは既に海拔三千三百尺。一合目から森林帶である。

二合目は茗荷岳の麓でこゝより漸次傾斜の度が強くなる。四合目で森林帶がつきる。これ以上は小屋は皆石室となる。

五合目で、中道に合し、東方三町に寶永の噴火口がある。これより益々嶮となる。八合目の大社三ノ鳥居をすぎれば九合目に出で胸突八丁をすぎると、大宮本社奥ノ院へ出る。

須走口

裾野驛より今里、中和田の諸村を經つて須山迄三里。近年この口から登る人稀であるからして、淋しい。本宮攝社淺間神社に詣うで、二里餘の大野原をすぐれば馬返である。こゝより一合二合と經て、三合目に至れば御殿場道と合する。

御殿場口

本口は明治十六年の開通で、鐵路の便頗るよいので、今では五口中第一に繁昌してゐる。寶永年間の噴火のために、この口には森林帶がない。下山路としては五道中第一で今では須走口を遙かにしのいでゐる。

頂上迄五里六町、驛から一里にして陸軍の廠舍のある瀧ヶ原へ出る。この附近は近來別莊地となつた。こゝより胎内くゞりへ廻るも一興である。こゝより一里にして馬返である。馬返以上には矮樹が疎生してゐる。これを出ぬけると一合目太郎坊、馬車はこれより上の二合五勺迄ゆく。

二合勺五以上は全く一木一草をみず、砂礫足を沒して歩行困難である。三合四合と寶永山陽をすぎ六合目で中道廻りの道と合する。（それより左折すれば寶永の噴火口を見ることが出來る）八合目から胸突八町の嶮をすぐれば、頂上銀明水の所へ出る、下りは七合の寶永山火口壁の邊から太郎坊迄一目散にかけおりることが出來る。砂走りの壯快ょ一度經驗したものでなければ分らない。砂走りの時に金剛杖が必要になつてくるの

である。

この口では七合五勺迄乗馬でゆける(十一圓)。こゝ迄馬でゆけば十四町歩けば頂上へ達するのである。(驛の東八町藍澤神社は承久役の犠牲者權中納言宗行卿を祀つた古祠である)

須走口

御殿場から馬車又は自動車でゆく(又籠坂峠をこして山中湖畔に出で、吉田へ出るも面白い)。暇あらば籠坂峠の中腹にある藤原光行卿の墓を訪ふべきである。光行卿は承久役の犠牲者で、捕虜となり鎌倉へ護送せられる途中この山中で首を切られたのである。須走町から約二十町ばかりの地である。

村の北端淺間神社へ御詣りしてから登る。馬返し(一里十二町)迄は廣漠たる裾野で野趣愛すべきものがある。馬返しから一合目太郎坊迄が森林帶である。一合以上は灌木帶で、藥草類が多い。五合に至り樹木全くつきる。八合目で吉田道と

合する。

四合目は延暦年間に噴火せる小富士、四合の室の右二丁餘の所に胎内と稱する洞窟がある。深さ凡そ十五間(五合五勺で御中道と會する)

この口では八合目迄乗馬でゆける。こゝ迄乗馬でゆけば頂上迄僅かに八町程歩けばよい。この口の特徴は頂上から太郎坊迄唯一と息にかけおりることが出來る點にある。

吉田口

吉田の附近には見るべきものが多い。明見の湖水(實際は小さい池跡)、山中湖、河口湖、に杖曳くも興深きものがある。

淺間の鳥居から頂上迄四里十十三丁十間である。六合迄乗馬の便がある。

登山道の狀況は、

登山門の附近に大なる古塚あり昔日本武尊富嶽遙拜遺跡と稱せらる登山者は茲にて身を潔め用意發程するを例とす參道の西半里に二個の洞窟あり新、舊胎内と云ふ内部は人體を擬して上顎肋高盥石胞衣腹帶等の稱あり。又中の茶屋の東方數丁に清泉あり泉瑞と云ふ清冽掬すべく相傳へて源右府卷狩の時全軍の渴を憂へ神に祈りて得たるものなりと清泉は淺間神社及福知村の用水たり。

裾野の盡くる處を馬返しと云ふ石華表を潛り二丁にして一合目大日如來あり登岳の第一歩なり是より樹木鬱蒼として晝尙暗く始めて俗界を脫して仙境に入るの思あり、次で役行者の修法せる定禪院の廢趾を見二合目に小室淺間神社あり山中一の古社にして武田氏の祈願書を藏す二合五勺に杖室あり古の改所にて此處より上は申年の外女人の登山を禁制せられしと云へり三四合目の邊は展望絕佳連山波の如く起伏し山中、河口の兩湖鏡の如く石楠の花縱林に匂ひて駒鳥の聲一山の寂寞を破る四合五勺に御座石あり昔角行法師修行の靈場なり五合目富士森稻荷を祀る參道漸く危險なれば乘馬駈籠是より通ぜず天地の境と稱せらる右方半里にして小御嶽神社あり嶺良姫を祀る境内森

嚴にして奉納の巨斧巨刀あり更に廻りて中道に入る經ヶ岳不淨ヶ岳あり經ヶ岳は日蓮上人修法の道場にして自筆の妙號は自然石に刻まり不淨ヶ岳は登山者の不淨を祓ふたる山伐の道場趾なり六合五勺より七合五勺の間を鎌岩と云ふ熔岩の骨立せるに依り途は急峻なるも、足の運は却て確となる七合三勺に聖德大子の小祠あり之より砂道愈々岨にして歩行漸く難む七合五勺に鳥帽岩あり岩石洞開して室をなす所明神を祀る傍に富士講元祖角行尊師六世の行者身祿の遺骨を納めたる石室あり是より崎嶇羊腸たる砂道を辿りて八合目に達すれば富士山ホテル其他數個の石室あり宿泊に便す。

又茲に救護所巡査駐在所郵便局賣店等あり九合目に日の御子と稱する一大圓石あり裂て五階をなす白色にして光輝あり萬象の影を映すこと明鏡の如く大陽東海より出でゝ是に映ずれば金光燦然たり由て名づく胸突八丁を越ゆれば卽頂上にして久須志神社あり各種の賣店は休憩に便す我身は既に富士より高きこと實に五尺餘四方展望の奇觀復云ふに及ばず中央に大空穴あり往古の噴火口にして御内院と稱す峰頭八瓣をなし業師ヶ岳淺間ヶ岳釋迦岳劍ヶ岳久須志岳と云ふ故に又御八景御八嶺とも云ふ噴火口は形摺

鉢の如く深さ數百尺積雪千古消えず勢至ヶ窪の邊には今尚烟霧立ちて熱氣の熾なる所あり賽の河原を過ぎ銀明水の清泉を掬ひ馬の脊越釋迦の割石親不知等の險を踰へ金明水の清冽を味ひ頂上氣象觀測所に出でて一週を了す(北口案内)

各口代表旅館と物價

(1)大宮口　中村屋、偕樂園、梅月、海松樓、橋本屋、河野屋、小松屋、天神樓山海樓、

(2)御殿場口、不老館、松屋旅館、大黑屋、橋本屋、田口屋、御殿場館、住吉屋松屋、福田屋、

(3)須走口、大米屋、大申樂、小申樂、甲州屋、米山館、穗館、武藏館、

(4)吉田口、芙蓉館、小菊、望岳館、神都館、吉田屋、他に講中の泊まる御師の家が四十軒ある。

物價は各口多少の差があるが、大體は左の標準でよい。

◈御殿場驛前旅館宿泊料金

一等宿泊料	金參圓以上	一等中食料	金壹圓五十錢以上
二等宿泊料	金貳圓五拾錢	二等中食料	金八拾錢
三等宿泊料	金貳圓	三等中食料	金五拾錢

◈携帶品

一金剛杖	金廿五錢	特別長	一本	一笠	金十三錢　上一個
一同	金十七錢	並	一本	一草鞋	金七錢　上一足
一蓙	金廿七錢	上	一枚	一同麻製	金十錢　上一足

◆合力案内賃

一金五圓也　大宮町ヨリ頂上御鉢廻リヲナシ下山口迄

但合力ノ携帶スル荷物ハ四貫目ヲ規定トシ以上五百匁ヲ增ス毎ニ金貳拾錢ヲ增

ス、尚風雪其他客都合ニテ御滯在スル時は凡テ客賄ヒノコト、午後六時ヨリ午後十二時迄ノ出發ハ賃金五割増申受候事、午前零時ヨリハ割増ヲナサズ他ノ口へ下山ノ時ハ一日日當金壹圓トシ外ニ汽車賃其他ノ實費ヲ申受ル事

御殿場

自動車——五本松迄二里八町（貨切八圓）

馬　車——太郎坊迄（一圓三十錢）

乘　馬——太郎坊迄（二圓三十錢）　四合迄（四圓五十錢）　五合目迄（五圓八錢）

七合五勺迄（十一圓）

須　走

御殿場より須走迄二里半、自動車貸切八圓、乘合一圓五十錢

馬車貸切五圓二十錢、乘合八十五錢

自動車——一合目迄一里十二町（一圓）

馬　車——一合目迄（一圓二十錢）

乘　馬——一合目迄（一圓二十錢）五合目迄（五圓）八合目迄（八圓）

吉田口

馬　車——中之茶屋迄（一圓十錢）

乘　馬——中之茶屋から馬返迄（二圓）馬返から五合目（一圓五十錢）

强　力——客一組荷物五貫目迄吉田口上下三圓七十五錢、中道迄三圓七十五錢

吉田口登山須走口下り四圓二十五錢

山中宿泊——一泊一圓五十錢、半泊一圓

御中道廻り

各口登路五合目位の所を一廻するのが『中道廻り』である。道程十三里である。表口五合より西に向つて順次見るべきものを書いておく。

五合石室をさる一里にして、執杖流、大滑浣、赤滑流、鬼ヶ澤流の諸險あり、此の間熔岩々類の變化を踏査するに適せりと云、更に正西、天の浮橋を經、天狗岩を右にして、不動石に至れば所謂大澤流足下に在り。九月に入るに隨ひ風變の爲め、巨巖落下すること殊に烈しといふ。而かも役祖角行の如きものは、是より直ちに前崖に神歩鬼行せりとぞ。不動岩下より、御棚下を降ること一里にして、大澤越場あり。之を渡り前崖を登ること、又一里弱御助小屋に至る。

是より西北の間滑澤流、木花澤、櫻澤、佛石澤等の二里餘の間、各種の喬木を看取り陰草を採集し、又奇禽の聲を耳にすることを得。正北天狗庭或は神庭と稱す。優遊横斷すること一里小御嶽に達すれば廣き休泊處あり、中道巡の者多く宿す是より吉田口石室に至る一里程、又左へ入りて不淨流澤、燕澤あり須走口五合(此間一里)。御殿場口六合(此間二里)に達す。尚ほ左へ巡り寶永山(十二神石、屠風石、牡丹石、臥龍石、蓮花石の觀あり)に到れば大洞穴あり其の熄火口なり

虎走を經て、西に返れば元の表口五合目に出て、一周することを得。

頂上御鉢廻り

頂上の噴火口を内院又は御鉢と唱へ、其廻りを一廻するを御鉢廻りと稱してる。(火口の深さ五八〇尺)之れに内廻りと外廻りとあり、前者は一里後者は一里半である。火口の周圍の火口壁中特起せるものに名をつけて『八葉の峰』とも云ふてをる。

吉田口から上ると久須志ヶ岳神社の前へ出る。(こゝに石室あり)こゝより伊豆ヶ岳、成就ヶ岳、東安河原をへて銀明水へ出る。途中に噴火口がある。銀明水から、駒ヶ岳を越えると大宮淺間の奥の院へ出る。(こゝに石室がある)コノシロ池と噴火口との緣との間を通つて三島ヶ岳の右肩を通り、少し下つて馬の背をこえると劍ヶ峰である。こゝが最高頂で海拔一萬二千三百七十尺(北緯三十五度二十三分、東經百三十八度四十四分、直立三十四町三十九尺)之

れより西安河原、金明水を經て久須志ヶ岳へ歸る。これが内廻りである。

嶮ヶ峰から、大澤の嶮をのぞみ、雷ヶ岳、白山ヶ岳を經て天拜所で内廻りの過と合するのが外廻りである。

山頂は午前十時頃から以後は雲霧に災されて眺望をさまたげられるからして出來る丈け、頂上で御來迎を拜む位の意氣で登るやう心がなければならない。

僅が八丁歩けば山頂へゆける

今では金さへつかえば樂に富士登山が出來る。須走口では八合目迄乘馬でゆけばよいのだ。

富士登山案内

一回の登山で富士の裏表を大觀しやうと云ふには、吉田口から登つて須走口が、

御殿場口に下山すると云ふ案がよい。吉田口は五口中最も登り易い道であり、須走御殿場の兩口は、砂走りがあるからして、下山道としては理想的である。

岳麓廻り（裾野廻り）

裾野めぐりは、是非一度御すゝめしたい。東海道方面からする人は、御殿場驛で下車、須走に出で籠坂をこえて甲斐に入り、山中、河口、西、精進、本栖の五湖をみて割石峠を越えて再び駿河に入り上井出村附近に建久四年富士卷狩の址をたずね大宮に出でゝ歸途につくのが順路である。この間道程は二十六里餘。馬車、渡舟（發動機船）鐵道の便を利用すれば歩く所は僅かに十里程である。これ丈けを廻る餘裕のない人は、中央線大月驛で下車し電車で吉田に出で、五湖めぐりをして大宮に出れば時間は短縮出來る。

（1）御殿場から須走を經て籠坂峠迄は爪先上りの坂路である。御殿場籠坂間自

動車一圓四十錢。峠をこせば山中湖（桂川の水源海拔三千二百七十尺）畔の山中へつく。こゝから馬車に乘つて吉田へ出る。吉田の芙蓉閣には、富士卷狩の際畠山庄司重忠の假屋に用ゐた遺材を以て建築したと云ふ古館がある。（建久館と云ふ）

(2)吉田から河口湖畔の舟津迄軌道を利用する。（賃金十五錢）發動機船に乘つて對岸長濱へわたる（六十錢）長濱から坂一つこせば西湖である。發動機船にのつて根場へわたる（四十五錢）根場から精進湖畔の赤池迄馬車を利用する（四十錢）精進の村で一泊する。海拔三千六百尺の烏帽子岳（精進パノラマ臺）へ登る。

精進から本栖湖畔の本栖迄乘馬、（二圓）本栖からは道幅もせまく今の所乘馬の便はない牧野ヶ原割石峠をこして人穴の里で有名な人穴を見る。人穴から上井出へ出で白糸の瀧、音止の瀧、祐經の墓、賴朝假屋敷の跡をみ、馬車鐵道で大宮へ出る。大宮から富士驛までは富士身延鐵道の便がある。

以上で裾野めぐりは終るのである。

大宮から十里木をこして御殿場迄の道は、小鳥の研究には誂へ向きの道であるが、茫々たる草原を歩くので、殊更らにこの道を通る人は極めて尠ない。

備考　猶富士については拙著富士と足柄、最新富士登山案内、富士と日本アルプス、日本登山案内等を參照せられたい。

房總方面

清澄山

勝浦驛下車。小湊を經て天津迄自動車及び馬車の便がある。天津から清澄寺迄一里五町は歩かねばならない。

山は古來安房國の名山として知られてゐる。海拔千二百六十三尺極めて低いが風光は雄大である。

清澄寺は、房州の名刹で頂上前額にある。寺前に旅舍がある。支峰八ッある。寶珠山（一一二五尺）富士山（寶珠と同じ位）如意山（一一一七尺）金剛山（一一一〇尺）露地山（一一一四尺）獨鈷山（八〇四尺）鷄莽山（五二〇尺）が主なるものである。山中日蓮上人の遺跡に富んでゐる。

曉のたれとき星も清澄の
海原遠くのぼる山かな　道興

鹿野山

鹿野山への登路は

（1）木更津驛—東南四里半。山麓迄自動車の便がある。（貨切八圓）

（2）佐貫驛——東二里、途中約一里は馬車。（四十錢）及び俥（九十錢）の便がある

（3）周西驛——東南麓迄三里、自動車（一圓二十錢）俥（三圓）の便がある。

海拔千二百十八尺、山上に神野寺と云ふ一古刹がある。門前に旅館かある。一夏を送るにはふさはしい地である。山中日本武尊をまつれる古祠、及び九十九谷の勝がある。東京灣を双眸に入れる風光もよい。小さい乍らも天神堀の瀑布もある。

山頂から鬼泪山をこして湊町へ出るも面白い。この道は草山つゞきで、春と秋の頃杖曳くには誂へ向きである。

鋸山

保田驛より山麓迄十七町。傳賃四十錢。又裏道とて濱金谷驛より登る道もある。

山は海拔千六十九尺、京京灣の門戸を扼し、山骨露出脚部以上分れて數峰をなしてゐる。其狀恰も鋸の齒を列ねたるが加くである。半腹に聖武帝の勅願寺僧行基の創建と云はれる日本寺がある。五百羅漢は有名である。今この域内は公園となつてゐる。

山の西端（石を伐り出してゐる場所の上に當る）を明金岬と云ひ、岬上が所謂十州一覽臺である。

山には妙金山、明金山、元名山、保太山、限山寺の異名がある。

富士山

岩井驛より山麓迄半里、傳賃三十五錢。

山は海拔千百二十二尺、八犬傳で著名な山で、山頂の展望頗るよい。二峰ありて凹字狀をなす。北峰に金刀比羅祠がある。樹木少なく眺望頗るよい。南峰は樹木茂り、古來航海者の目標となつてゐる。仁王門と觀音堂がある。富山の南方に伊豫ヶ岳が聳えてゐる。暇あらば一度は杖を曳くべきである。この山の眺望は蓋し安房第一であらふ。

中央線

御岳山

立川驛から青梅電鐵にのり、二俣尾で下車し御岳山へ二里。登路平易、婦女子の一日の散策に適する。

又五日市鐵道の終點五日市から登るもよい。二俣尾から御岳へ登り五日市へ下るは利巧な旅行案である。

山は海拔八百六十四米、（奥院は千七十米）。三田村大字御嶽より神社迄三十町。御岳神社は府社で、大己貴尊、少彦名の尊を祀り崇神天皇七年の創建と云はれる古社である。（社格は府社）又この山を金峰山とも云ふは、行基菩薩が大和の金峰山に擬して藏王權現をを當山に勸請せしがゆゑであると云はれてゐる。近世俗信の的となつてゐる。

社前に旅館、御師の家があつて登山者を宿泊せしめてゐる。七代の瀧、禊の瀧鸚鵡石等を見て奥の院へゆかねば御岳の勝を語ることは出來ない。又暇あらば男女の瀧をみて大岳の頂上をきはめ再び御嶽神社へ戻るも面白い。

大嶽山

御岳から山傳ひにゆける。御岳神社から山頂の大岳神社迄五十町である。五日市から檜原に出で、八割から登るのが本道である。

大嶽山は海拔四千二百九十尺、武州西多摩郡中第一の高山で、山頂に大嶽神社が鎭座ましましてゐる。檜原から半道八割の麓宮から頂上迄四十町。山頂に至る間の風光は風情深く或る人は東京府下第一の風光だと云ふて之を推奬してゐる。但し登山路は相當にあれてゐる。この邊から御前山へかけては小鳥、兎などは澤山

にゐる。最近はへつたが夫れでも秋になると時折り熊も姿をあらはすそうだ。けれ共滅多に人に危害を加へないからして安心してゐてよい。

この邊へくると山らしい感じが濃厚になつてくる。

御前山

五日市から檜原村に至り字小澤から登る。頂上迄三里半。又神戸川の谷から登つて有名な神戸岩を見て、御前の峰をきはめるも一法である。

武州御岳の頂上から大岳、御前へと縱定するも面白い。但し道はわるいからして夫れ丈けは豫め覺悟せねばならない。

山頂は海拔千四百五米、東京近くに於いて深山幽谷の氣を味ふには誂へ向きの山である。是非一度は杖を曳き給へと御すゝめする。

大菩薩峠

二俣尾驛で下車し、氷川町に出で左折し甲州街道をすゝみ丹波山の里に至る（一日程）、こゝを出發點とする。

丹波山へは、中央線鹽山驛で下車し柳澤峠をこえてもゆける。

丹波山は山中の平和の村で、旅館は野村屋と云ふ家一軒しかない。しかも一年を通して泊る人は何人と云ふ位なので、平生は養蠶をやつたり、山畑を耕したりして生活してゐる。丹波山から大菩薩へは舊道が殘つてゐるけれ共迷路多きを以て必らず案内者を雇はねばならない。大菩薩は六千三百八十九尺、山頂から、甲武國境の山々峰々、南アルプスの雄峰を眺める風光は、天下に冠たるものがある。

山頂から峰傳ひに柳澤峠へ出て甲州へ出るも面白い。

『新羅三郎奥州を征する時、此路に至りしに、山中の草木繁茂して道を辨じ

難し。時に壯者の馬をひき乘るものあり。爲めに響導して嶺上に達し、忽然として其所在を失ふ。義光遙に西顧して笛吹川邊を望眺すれば、八旒の白旗風に飜へるを見る、即ち神軍擁護の驗なりとて、遙拜して南無八幡大菩薩と高聲に讃嘆す。是に依つてつひに嶺名となれり』と。

中世佛法盛んに行はるゝ頃、本地佛の觀音を嶺上に安置せるによりて、大菩薩の名をえたりとあり』（甲斐國誌）

柳澤峠が開かれる迄は、甲州裏道はこの峠を越えたのである。俗に上下八里と云はれてゐた。

私等は丹波山村での初めの豫定通りは遂行したのであるが、こゝへ來てから大菩薩を登つて見たくなつた。又こゝへらで一番高いと云ふ唐松尾へも攀ぢたくなつたので明日はこゝから大菩薩に登つて落合へ迂回して、それから落合で又別に案内者を傭ふて、唐松尾へ登らうと云ふことで、段々考が無鐵砲になつて來た。そこで大菩薩まで

の案内者を其晩頼んで置いた。

明くる三十一日、起きて見ると、雪がうすく地上に積つてゐる。併し空ははれさうなので、出掛けることにする。昨日飛龍へ登つた時の案内者と異つた男が、案内者となつて行く。多摩川を渡つて少しくのぼると右に貝澤を見て、道は山崖を迂つて行く木々は雪をつけて、晴れ行く空にいやが上に白く、其間を私等は面白く眺めながら、案内者は獵師なので山の話をきく。彼は今日は歸りに何か獲物がありさうだと云ふので、鐵砲を背負つて來てゐる。かれこれ峠へ半分近くも來た頃、左右に針葉樹美はしい並樹のやうに連つてゐる間を横斷して行く。峠へ近くなるところで、小管へ行く道と合して、そこから先は雪が俄かに深くなる。空は益々はれてふりかへると、間近くに鷄冠山が白雪あざかに聳ち、其右に飛龍、雲取が天涯を劃して、雲取から七石山につづく嶺はおぞ毛が立つほど際立つて白い。東の方には三頭山は大きな體軀を突立つて、密林の間に雪が白く閃めいて居る。

進むにつれて雪深く笹を蔽ひかくして居る。峠の頂上の手前に新太郎と云ふ人の立

札があつて、風雨はげしい折は、立寄つて休んで行くやうに、或は場合によつては泊めもすると云ふことが書いてある。新太郎とは、右の谷にある炭燒の持主の名である。峠の頂上へついたのは十一時頃で、そこで私等は晝飯を喰つて、案内者から大菩薩岳の頂上から柳澤峠まで嶺傳ひに行く道をきいて、案内者を丹波山へ返してしまつた。

こゝから大菩薩の頂上までは、妙見岳外一つの峰を越して、行かなければならない。そして積雪約三尺より四尺、途中風は切るやうに鋭どい。大菩薩岳の頂上で、私等は雪の中に突立つて環望した。甲武國境の山々、南アルプスの諸山は、私等が今までに見たことのない偉麗を以て、そして其時分には珍らしいほどのあざやかさを以てあらはれて居る。私等は驚異の眼をひらいて、寒風に晒されながら見とれて仕舞つた。中村君は無爲にこゝを離るゝことが出來ないと云つて、スケッチをはじめる。そして終つてから、私等は、又、驚嘆しながら眺める。（日本アルプスと秩父巡禮）

飛龍山

丹波山から登る。

丹波山から半里ばかりゆくと大洞から東南に長くのびてゐる尾根につく。この尾根を登つてゆくのである。約二里も登ると前飛龍へ達する。高さは六千四百八十六尺である。

こゝから少し下り氣味になり、又登ると石楠花横町と云ふ石楠花の多い所がある。國境近くへゆくと朽ちかゝつた飛龍權現祠がある。こゝから暫らく登ると飛龍の頂上である。

山頂の風光は雄大である。丹波山から登り五時間、下り三時間を要する。

飛龍から唐松尾に出で柳澤峠へ出るは面白い案だが、山中で一泊せねばならぬ。隨つて天幕を用意しなければならない。

唐松尾

柳澤峠を起點とする。柳澤峠へは丹波山からも又中央線鹽山驛からもゆける。唐松尾から秩父の强石へと向つての縱走は三日がゝりであるが、趣き深きものがある。

鹽山からゆけば峠をこして落合（茶屋がある）をへて高橋から犬切峠をこえる、一ノ瀨二ノ瀨をへて三ノ瀨から愈々唐松尾に登る。道程は一里だが、足の弱いものでは三時間かゝる。七千尺の峰頭を吹く風は夏猶ほ寒い。

唐松尾——牛王院山——將監峠（六千二百尺）——龍バミ山——飛龍山——栂澤山——三條ダルミ笹原——雲取——三峰——强石と云ふ順で縱走するのである。この道程は夏ならば申分ないが、秋のもなかに、山々谷々が紅葉する頃平の維茂を氣取つて縱走してみるも面白い。

小佛峠

大正帝御陵墓參拜の下車驛淺川で下車して登る。峠をおりれば小原の里でまもなく與瀨驛である。秋の小佛は趣き深い。昔は甲州街道の難所であつたが今ではトンネルがあるので、わざ〳〵峠をこす人は少ない。）

小佛峠は千七百十九尺、御陵墓參拜のかへりに登つて、高尾山に出で淺川へ歸る案は面白い山散歩である。更らに小佛の峰から武州國境の山々峰々を傳はつて多摩川の上流をわたり雲取の峰へ出る縱走案は面白いが野營の必要があるので一寸臆劫である。

小佛峠の中途にある製板所邊から材木を切落す斜面を登ると景信山へ出る。ここから陳場（ジン）ケ峰（八五七米）をへて和田峠へ出る案は日歸に適する。

小佛峠は、上下二里、絕頂は道を挾んで國を異にし、西南には富士山が肩に迫つて聳えてゐる。往古こゝに關所があつた頃には、富士見の關と呼んだこともあつた。關址は淺川驛の西方約十五町駒木野にある。（古びた石垣と老松がのこつてゐる）關所の起

原は古いが、嚴重に旅人を取しまるやうになつたのは德川時代になつてからである。（駒木野關とも云はれた）街道の要衝あるから古來軍防上重んぜられてゐた。永祿十二年に武田信玄小田原發向の際には大軍を率ゐて此峠を通つてゐる。明治六年には參謀板垣退助が官軍を率ゐて此地を通過して江戸に入つた。

武藏野の西南隅が山性を帶びて來て、初は丘陵にすぎないものが、西へ寄るにつれて、やがては高距五六百米の、何々山と名のつく一かどの山岳となり、次第に西に遠ざかるに從つて、一千米を超える山岳が現はれ、それが更に西に赴くや、假令一上一下はあるにしても、漸く高距を增加して、終に土地はもう甲州の領分に入るが、西の空にスカイラインを劃し、六千尺に出入する連峯は、一萬尺を超える赤石山系北部の尤物をしてさへ、其背後から帝都を窺ふことを許さない。此南北に蜿々たる大屏風を立廻す山脈こそは、人も知る大菩薩連嶺である。

大菩薩連嶺の西側からは、笛吹川に流入する重川（又面川）と日川（又三日川或は三日血川）が產れるが、東側の斜面に降る雨や谷に積る雪は、東に流下して多摩川及び相模川の源流の一部をなすのである。されば此二川は、大菩薩連嶺から東に派出する山脈によつて分隔されて、一は其北を流れて東京灣に入り、他は南に沿うて走つて終に相模灣に注ぐことになるのである。

山は新綠に交はるツ、ジにほひ、河岸は紫のヤマフヂに彩られる五月の頃に、大菩薩連嶺を起點として、左右に多摩川との源流を俯瞰しながら、此分水山脊を東に辿るか、左なくばその逆に、六千尺の大屏風を目標として、此長大な尾根を西に傳つて見たいとは、私の年來の希望ではあるが、不良な天候や俗用といふ山の旅には禁物な條件につき纏はれて、此無理でもなさうな慾望は未だに充實されないで、尾根の大部分は未踏の地として殘つて居る。醜つて同好の人々の足跡を尋ねて見ても、未だ此分水脊の全部を跋涉した形跡はないやうで、全般に亘つた記錄に至つては從つて絶無と稱するより致方がない。私の知つて居る處で、此連脈を最長距離に亘つて縱走されたのは、木暮、田部の兩君で、景信山から陣場ヶ峰、和田峠等を經て、三頭山の南の一

角一四六〇米の峰頭迄を、二日に跨つて通過されたのである。(「山岳」第十一年第一號一五一頁及び田部氏著「日本アルプスと秩父巡禮」一五六頁以下參照)。私自身の僅な經驗は、到底語るにも足りないが、責任を明にするが爲に大體を述べると、縱走としては、此連脈西端の小部分と、淺間峠から醍醐峠までと、陣場ヶ峰から高尾山の間、及び大平山から高山の間を、或部分は一回、或部分は數回通過したにすぎないし、横斷としは鶴峠、栗坂峠、三國峠、醍醐峠、和田峠、南郷峠、明王峠、案下峠、小佛峠大弛峠、案内、榎之久保、七國峠、及び案内峠と榎之久保との中間にある名稱不明の峠の全部又は一半を一回以上通過したにすぎない。尤も此連脈に關する知識は、以上列擧した分水脊以外に、其支脈を縱走又は横斷して、山脈を望見したことは一再に止らないが、今は直接に必要がないから、敢て記すことを止めにする。

斯の如く私の足跡が一部分に限られて居ることは、勢此記事にも精粗厚薄の部分を生ずる原因で、これは現在の處どうにも致方がない。そして私が長近興味を集中したのは、武甲相三國の界に當る三國山附近と、それから東に當る武相境の脈上小佛峠に

至るまでとある。又私が跋渉の際と此記事執筆の折とに常に參照して、少からぬ暗示や解決を得たものは、甲州に關する部分は松平定能編輯の「甲斐國志」中森島彌十郎の調査になる都留郡の部と、武州に關する處は德川幕府編纂の「新編武藏風土記稿」中主に多摩郡の部、及び故河田羅氏の著になる「武藏通志」山岳篇(「山岳」第十一年第一號所載)で、相州に關する箇所は、同じく德川幕府の編纂に係はる「新編相模國風土記稿」中津久井郡の部これが小金澤(寧ろ正しくは黄金澤、時に金澤と記さるゝこと——甲斐國志の或部分——がある)と合流する地點の、東稍北に當る一三四九米と測られた御坊山(宛字)なる峰迄の部分が、眞正の分水脊で、その以東は、共に相模川に注ぐ處の葛野川と鶴川との分水脊をなすに過ぎないのである。

然らば多摩と相模との兩川の水を分ける脈はどれになるかといふに、御坊山の東稍北に當る三頭山から東南に曳く長大な尾根が卽ちそれであつて、御坊山と三頭山とのつながりは、此の兩山から出る比較的短小な山の尾によつてなされるので、其の間の鞍部は卽ち高距八八五米の鶴峠である。

最高點一五二七米と註さるゝ三頭山から、東南に引く長い山脈は、槇寄山を經て丸山に至るまでは一千米以上の高度を保つが、その東では只一二の峰頭のみが一千米突を僅かに突破するのみで、山脈は漸を追うて低まり、淺間峠の稍西方に至つては、八百米を超ゆること極めて僅となつてしまうが、栗坂峠の東から漸く高度を增して、生藤山の直東では再び一千米以上に出でゝ居る。しかしそれも束の間で、其の東半里許の醍醐峠に至ると、已に八百米以下に下つてしまふ。それと同時に山脈の主力は急に折れて北に向ひ、市道山で復二岐して、更に北に赴くものは臼杵山に向ひ、東に向ふものは鳥切場からこれも急に北に折れて、刈寄山や小峰峠の方に連つてしまふ。しかし此の山脈中でも分水脊をなす部分は、醍醐峠から再び隆起して高岩山を起し、此處でまた分水脊から離れて本宮、御堂窪に連つて、終には醒醒川と案下川との間に終つしまふのである。

以上述べた分水脊をなす第二の山脈の後を享くるものは、八五七米の高距を有する陣場ヶ峰を起點とし、時には南、時には北に彎曲しつゝ堂所山に至り、此處で二派に

分れて主脈は景信山を起し、小佛峠を經て城山に至り、こゝから分水脊をなす部分は甲州街道の大弛と呼ばるゝ所へ下つて終つてしまふが、寧ろ主脈とも云ふ可き部分は高尾山へと連つて、末は丘陵に化してしまふ。一方堂所で分派した他の一部は、主脈の北を東に走り、末は小佛川に注ぐ處の小下澤の左岸に連亘し、漸次數派に分れて末は丘陵となつてしまふのである。此の分水脊第三の脈と上述の第二の脈と接する所は高距六七〇米の和田峠一に案下峠とも呼ばるゝ鞍部で、昔の甲州街道裏道である。

さて現今の甲州街道をなす國道の大弛と呼ばれる部分は武相の國境に跨つて高距約四〇〇米を算し、武州の案内村から緩に上る道は、國境をこえると直に相州千木良に向つて急に下つて行く。大弛以東で分水脊をなす山脈は、一里餘の間相模川本流の左岸に密接し、城壁の如く連なる低い山脈で、最高點は高距五三〇米の大平山で、これから東北に連る金比羅山(五〇六米)、槇之窪山を經て、急に東南に曲る邊迄は武相の國境をなす山脈であるが、此邊で境川が發源し、國境は間もなく東に下つて境川に沿ふと共に、分水脊も枝を打つて、主脈は多摩川と境川との分水脊

をなし、他は境川と相模川との分水脊をなすことになる。かくして主脈は漸次に丘陵と化しながら、右曲左折し、やがて七國峠(約二〇〇米)に及び、これ以東は益々高度を減じて、田端の北の一八四米の測點を經て小山の北に至り、續いて東南に走つて、八王子街道と略平行しながら、木曾や原町田を經て、辻の東の高距一〇〇・四米と註さるゝ高尾山に至る事となるのである。

斯く分水脊の高距が減ずるについて、分水脊と多摩川本流なり又は相模川本流なりとの間に、幾筋かの小流が起つて、その或者は他の者と合流するとしても、終には多摩、相模兩川の何れにも流入せずして、單獨に海に注ぐ事になる。分水脊と多摩川との間に於ける帷子川や、鶴見川や相模川寄での境川、引地川等は卽ちそれである。

高尾山

淺川驛から山麓迄半里、自動車(高尾山)の便がある。登山は『ケーブルカー』を

利用することも出來る。秋の紅葉がよい。

山は海拔千九百八十五尺の一丘陵にすぎないが、頂上見晴臺の風光は高山の趣き深きものがある。登り口より頂上迄約二十町、之を一合より十合迄に分つてゐる(八合目迄ケーブルカーでゆける)全山殆んど密林をなしてゐる。途中蛇瀧と琵琶瀧とに降りに道がある。精神病を治するに効ありとて夏に御こもりするものが多い。

頂上には飯縄權現、大日堂、護摩堂、大師堂、不動堂、地藏堂、額堂、鐘樓其の他の建物が老杉の間に配せられてたつてゐる。寺は有喜寺と云ひ、新義眞言宗智山派に屬してゐる。天平十六年僧行基の開基、後永和年間中興沙門俊源が靈夢により飯縄權現を勸請して一山の鎭護とした。これ以後遠近の信仰を集めえたのである。北條氏康及氏照は各七十五石の寺領を寄附し德川氏また慶安年中に寺領安堵の朱印を附與した。

奥ノ院の西數町を登ると十二國見晴臺である。見晴臺から草山を下り山の背を

越えて小佛に至り與瀬驛へ下る案は修學旅行にとつては誂へ向きである。この道は余が天下に紹介して以來多くの人によつて試みられるに至つた。

昔は佛法僧と云ふ靈鳥がゐたさうだが、今では俗化したせいか、靈鳥も姿を見せない。隨つて『ブッポーソー』となく聲もきこえない。

燒山から丹澤山縱走

中央線與瀬驛で下車し燒山から丹澤山塊への縱走を試みるは土曜の午後から日曜へかけての山の旅としては興味深きものである。

與瀬で下車し、相摸川の釣橋を渡つて靑野原村の長野で一泊（泉屋と云ふ旅館に一泊）翌日は大旅行を敢えてせねばならぬ。

長野から燒山をへて蛭ヶ岳へ出る。蛭の頂上は頗る眺望がよい。玄倉の谷を目の下に、遠く富士足柄連山を見る。こゝより尾根通しの道を下つて丹澤へと向ふ。

この邊は笹が名物だ。（長野から蛭の絕頂迄五時間乃至六時間かゝる）

蛭から丹澤の絕頂迄は二時半位の道程である。こゝは一面の茅戸で、かなり廣々としてゐる。眺望は東南のみである。こゝから塔ノ岳の頂上迄三時間行程である。塔ヶ岳の頂上には小さな石の祠があつて廻りに地藏樣が立つてゐる。こゝから相摸灣を見下す風光は天下のみものである。こゝから秦野へ向つて下るのである。秦野から輕鐵に乘つて東海道線二ノ宮驛へ出る。

塔ノ岳は、孫佛山、尊佛山と云ひ、高さ四千九百二十三尺、尊佛山と稱するは山の中腹に思尊佛と唱ふる大石あるがゆゑである。總じて丹澤山塊は、大正十二年の震災のために大分破壞せられた。

左に松本善二氏が試みた燒山丹澤山縱走のコースとタイムをしるしておく。

參照地圖。（二萬分）　上野原、中野村、牧野村、蛭ヶ岳、塔ヶ岳。（五萬分）　上野原松田惣領。

費したる時間。

第一日、與瀬發、午後五時。長野着、八時。

第二日、長野發、午前四時。燒山。五時三十分。蛭岳着、九時。

同所發、九時三十分。丹澤着、十二時。同所發、十二時三十分。

塔岳着、二時。同所發、二時二十五分。秦野停車場着、六時。

大體に於て時期と氣候さへ好ければ、此の行程は、決して困難ではない。

時期は、四、五月か十、十一月がよい。

岩殿山

中央線猿橋驛下車。

中央線の汽車が猿橋驛を出て大月へ向ふ時、桂川を隔てゝ右方に見ゆる巖面峨々たる山が岩殿山である。猿橋驛より山迄頂一時間半、大月驛より一時間。

中古小山田氏の城のあつた所だ。この山は海拔僅かに六二〇米と云ふ低さであ

るが、東京附近でロープを使用しての岩石登りの練習場としては誂へ向きである。

附記 富士山麓五湖の一、西湖の北岸に聳立すること一六八四米の十二岳も岩峰で岩登り練習の好適地である。

百藏山

東京から日歸りの山登りには誂へ向きである。百藏山は多摩相摸兩川の分水山脈の一峰である。

『扇山から西南に曳く尾は袴着の部落に向つて低下するが、西北に曳くものは袴着と宮谷との境の瀧ノ澤の源に、東西に連る屏風の樣な山背に續き、一旦南に折れてから高距一〇〇四米の百藏山を起し其末は葛野川に終ることゝなる。この扇山と百藏山とを連結する約八百米の尾根は甲斐國誌によると長尾山なる稱があるやうである。（武田文吉）

猿橋からでは大神宮の側から北に道をとるのが一番便利である。西麓葛野からも登れる。けれ共本道は下和田からの登り道である。下和田に、百藏山春日明神が鎭座してゐる。山頂は東西に長く灌木の他に樹木がない。けれ共眺望は非常によい。近く大室山から麻生につゞく長大な脈を望むには眺へ向きである。一度は登るべきである。

三ツ峠山

近來、山遊行樂の地として有名になつたのは三ツ峠山である。それへ登るには中央線大月驛で下車し、小沼迄電車にのる。小沼から頂上迄一里二十八町十三間である。

山は海拔五千三百七十尺、突兀たる三朶峰なるを以て三ツ峠山と云はれる。怪巖奇石重疊、高山植物に富んでゐる。又山中に南北朝時代の史蹟があら。頂上の風

光は雄大である。頂上より河口湖畔迄二里餘、笹子驛へ四里半、神狩驛へ三里半である。

甲斐國誌云ふ

『其峰は奇石峨々として三峰に秀づ。故に三ツ峠(三峰)と云ふ。岩上に小祠ありて後へは岩上にあり。これに上れば覆らんとするが如く。其余斷片奇石、景象畫くが如し。

御坂峠(三坂峠)

富士山麓の吉田から甲州平原へゆく通路である。富士登山口の吉田から河口湖畔に出で、河口淺間前より一里十八町にして頂上に達する。

富士見三景の一と云はれる丈けあつて、富士山の全體を望みうるのみならず河

口湖を下瞰し風景絶可である。（古來この峠より富士を望むを御坂富士と稱せらる）

御坂路に氷かしかける甲斐が根の
さながら晒す手作りのごと

頂上は海拔五千三十二尺、一里十八町にして黒駒村字藤ノ木へ下る。頂上より三ッ峠迄一里餘である。

景行帝の御宇、日本武尊は足柄より此坂を越えて、甲府へ向はせ給ふたのである。日本武尊御通行の山なれば御坂の名が起つたと云ひつたへられてゐる。峠路はかなり急な坂路で、中腹以上は屈曲頗る多く俗に十二曲りと云はれてゐる。

神座山

御坂峠の西に聳えたつ山で、黒駒村から頂上迄約一里。山中樹木多く、檜峰の神社がある。

十二岳

海拔五千五百五十七尺、南都留の大石から登る。頂上迄一里十八町。岩登り練習には誂へ向きの地である。十二の峰屹立し、櫛の齒を立てたるが如くなりとて十二嶺の名が起つた。古へ修行者小角が富士に登攀する前この山中で行法したと云ふことが舊記にみえてゐる。山頂に最上權現と云へる、小祠がある。蓋し山靈を祀つたものである。山頂より富士を大觀する風光は雄大である。頂上より河口湖畔迄二里餘。

精進パノラマ（烏帽子ヶ岳）

吉田より精進へ出る。（富士山の部參照）精進から頂上迄二十一町。山頂は海拔三千六百尺、眺望絶佳である。

笹子嶺

笹子驛より峠の絶頂迄一里半。今鐵道はこの峠を横貫してゆく。トンネルの長さ一萬五千二百七十五呎、現時に於いては日本一のトンネルである。

笹籠峠、坂東山とも云ひ、海拔三千四百九十尺、古來甲州街道第一の難所と云はれてゐた。中腹に矢立杉と云ふ名木がある。（周り二丈三尺九寸）鐵道通じて以來通行人稀れなため山道はあれはてゝ、時折り猿が出る。頂上から一里半にして初鹿野へつく。

八月十三日過篠子嶺

山深奔水響念諱。風氣冷々吹帽紗。
朝露未晞松洞路。野香霑袖忍冬花。

小永井小舟

乾德山

塩山驛下車

鹽山驛の附近から、ビラミッド形に見える。奥千丈（八千二百尺）の一支脈である。鹽山でおりたらば、松里村に出で笛吹川の東岸に沿うてさかのぼり、三富村に至る。（驛より二里）こゝより五町ばかり北し、左方の峻路に入れば半里にして德和の部落につく。

この部落から登山路がある。約一里にして乾德神社の前宮がある。社殿の後ろから緩傾斜の草原を登る。草原がつきると鞍部がある、こゝから左方の小稜を岩峰めがけて登るのであるが、頂上迄は可成に苦しい、頂上は僅かに數坪、前に乾德神社の奥の院がある。風光は雄大である。

山勢巍然として他に秀で、四望開豁なり。夢想國師一夏面壁の地と云ふ。國

師後に慧林寺を草し、乾德を山號となす。山中に座禮石、枕石、休息石等あり。（山岳志）

土曜の夜行列車で東京を出發し、日曜の夜歸京すると云ふには誂へ向きである。

甲州御岳

甲府驛から御岳金櫻神社迄北四里、和田峠を經る道と、吉澤峠を經る道とがあり兩者は天神平であふ、車は天神平迄二圓。

自動車は吉澤村迄一里十町貸切六圓。

天神平から北二里の間、荒川の河岸に山水の奇勝が多いのである。

御岳の勝は天神平から初まる、望鷹石、長瀞、不動瀧、駱駝石、猿石、結松、五月雨岩、寒山拾得岩、轆轤瀧、登龍岩、天鼓林、膽石、羅寒山、天狗岩、夢の松島、覺圓峰、石門、雨避岩、雪紅瀧、昇仙峽、仙峨瀧等見るべきもの多い。仙

峨の瀧から猪狩村をへて二十町ゆくと御岳金櫻神社である。

金櫻神社は、海拔三千百二十尺、境内は頗る幽邃である。祠前石段下に旅舍がある。凡そ今踏む所の御岳新道は文化四年に長田圓右衛門が單身工を起し二十星霜を經、始めて完成したものである。かへりは舊道を通るも趣味深い。

神社から奥七里に、日本一の紅葉鄕と云はれる瑞牆山の勝がある。瑞牆山の勝をみてラヂウム泉で名高い增富に出るも一興。

又黑平をへて金峰山の本宮に詣うずるも一興。

金峰山

甲信二州に跨り、海拔八千四百二十尺。御岳神社前から、水晶の產地として有名な黑平へゆく。路は可成急な所はあるが、美くしい落葉松が樹立して、頗る氣持がよい。金峰の山登りは上黑平から上は無人の境である。登路は御室川の溪谷に

沿ふてゐる。六合邊りからは樹木も段々小さくなり大きな岩石が累々として重なり合つてゐる。頂に小祠がある。山宮と稱し、少彦名命を祀る。この邊には甲武信岳(八千百尺)國師ヶ岳(八千四百尺)奥仙丈(八千二百尺)等の高山が聳えてゐる。金峰から雁坂峠へ出る山の草鞋旅びも面白い。(黒平から金峰の頂上迄はユツクリ日歸りが出來る)

御室川はこゝで下流れとなつてゐて、白い河原は暗を縫ふて白く光り、寒い風が吹き渡つて居る。金峰の登口には水が無いに定つて居るので、こゝからは河原を下る方が近からうと云ふので下れば、瀨の音が近くに聞える。二三町にして俄かに多量の水が溢出してゐる。其あたりの林の中に野宿の場所を定めて、そこいら一面に岩が多くて空地が餘りないのを、背を大きな岩によせかけて川を前にして焚火をする。ひどく疲れた足を引き立てゝ、御飯の用意をする。飯を終へると、睡氣が頻りに襲つて來るが、寒いので中々寢られない。夜中に火をかきたてゝ、甘酒をこしらへて二人を起せど二人とも生氣がない。梅澤君の三人に對する折角の好意は、殆んど私一人で壓斷せざるの止むを得ざるに至つた。しかし甘酒の罐詰二つを、何うして私一人で平らげたかは、今になつて、それを湯にとかす分量を眞に知つた私には、可笑しくて堪らない。

次の朝四時に起きて、飯の用意をする。今日は晝飯をたく水が無からうと云ふので一度に炊いて置く。七時に出掛けたが、昨日の疲れが直つて居ないので、足がはかどらない。御室川を遡つて金峰へ登りかけると、瀨の音が遠くなり、幽寂の趣があたりを込める。途中南アルプスの姿が見える毎に、思はず嘆美の聲をあげる。殘雪が處々にあるやうになつたのが、六合目あたりからだらう。段々樹木が小さくなり、大きな岩石が壘々として重なり合ふてゐるのを登り行けば、間もなく頂上に着く、其時は十時頃であつた。

川端下から初めて金峰に登山した數年前の時は、霧にまかれて何物をも見ることが出來なかつたに引きかへ、今日は何たる好日和であらう。東海の富士は斑雪が扇のひだのやうに美はしく、六合目以下は横に霞が三段にかゝり、南アルプスの雄大なる山系は云ふまでもなく、八ヶ岳の右には、北アルプスが眞白に齒立して、上州の山々は

殘雪を帶びて、更に其の右に光つて見える。八ヶ岳の裾野から南佐久へかけての初春は、やうやう動きつゝある。凄いやうに白く冴えてゐる八ヶ岳の頂から漸次に黑く、そして樺色に、やがては萠黃にうつりかはる山の色合は、渾然として雄大なる五月の山姿をまのあたりにひろげる。

頂上の三角臺の石に仰向になつてゐると、二人の登山客がやつて來る。今朝、黑平を出掛けたのだと云ふ。行手の秩父方面を見やる、甲武岳、三寶山等の主峰は、國師の向ふに遠く見えて、前途が頗る遠い感じがするが、それだけ渡るべき山々の多いのが嬉しく思はせる。天氣は申し分がない。これが永く續けばよいと、只それのみが願はしい。暫らくして朝日岳の方へ向ふ。(田邊重治)

身延山

甲府から鰍澤迄四里二十五町(自動車一圓、一時間馬車七十五錢二時間)鰍澤から波高島まで、舟行五里(飛行艇下り一圓五十錢上り三圓)波高島から身延迄一里。

東海道線富士驛より富士身延鐵道にのり、身延驛下車身延迄三十町。

身延は日蓮宗の靈地である。久遠寺本堂より登ること五十町。山頂稍平坦なる所に奥ノ院、祖師堂、東照宮、仁王門等がある。祖師堂は宗祖日蓮が九年間、時時この峠に登つて安房の方を遠望し、父母の墓を念じた所と云はれてゐる。

山は海拔三千七百八十八尺、幽玄の境である。

身延山頂祖師堂より大蓮坂をこえ樋澤川に沿うて西に下り追分に出で、更らに西ヶ谷の檀村をへて七面山へ登るのである。祖師堂より七面の頂上迄約四里。(五千八百五十一尺)

山頂に七面天女を祀る堂宇がある。此山より南眺すれば、駿豆相房の海嶽は目捷にあり、人をして我が身仙境にあるの思ひあらしむる。

茅ケ岳

中央線龍王驛より山麓迄三里。登るに左程の困難はない。淺尾より一里十八町にして山頂に達する。

海拔四千五百尺級の山で、噴火口のない塊火山である。山頂よりの、風光は雄大である。裾野は長者原、淺尾原で、廣さ三里、大陸的の臭いがする。一度は杖曳くべき所ぞかし。

八ケ岳

八ヶ岳の、登山口は頗る多い。中央線でゆくものは、茅野驛で下車するのが便利である。この驛からおりて驛北四里乃至五里の間、蓼科、八ヶ岳山麓地方に瀧、明治、巖、澁、唐澤の諸温泉がある。(これらを俗に山の湯と云ふ)之れらの諸温泉を

根據として、八ヶ岳、立科山へ登るは最も便利である。

信越線御代田から七里、馬流から本澤温泉(海拔七千尺)に出で登るもよい。

八ヶ岳は、甲信二州に跨り、富士帶火山脈中の一大噴火山である。(休火山)海拔九千六百七十六尺。山峰八に分るゝが故に八ッヶ岳の名がある。八峰中、赤岳最も高く、其眺望は雄大である。一小祠がある。山中高山植物に富んでゐる。

甲斐大泉村字谷戸(ヤト)より登る。山麓に一大泉あり、こゝより里程燕岩に達す。

岩は怪岩山石を以て疊み、

岩燕の巣多く、燕群の上下に飛翔するを見る、已にして三の室に到る、少量の水を附近に存す、猶登れば所謂御花畑を見る、即ら八ヶ嶽八峰中の編笠嶽に達したるなり已にして偃松、石楠花の間を過ぎり、權現嶽に到れば、巨岩厦屋の如きもの屹立す、一祠あり、扁して權現宮と稱す、脚下は削れる如き絶壁にして、四望すれば釜無川、大武川、小武川、絹糸の如く地を繡し、不二高く雲表に拔き、氷山の氷海を破りて出

たる如く、大泉、小泉、立澤、小淵澤、篠尾、追分等の諸村落、裾野の綠氈中に包まる、櫨現嶽より直ちに山中第一の高點赤岳に到り得、この山大泉村より高きこと、正に七千九百尺、村民は毎年舊曆八月十一日を祭日とし、登賽するもの多し。」（谷戸の外に、猶この方面よりの登路數條あるが如くなれどいづれも正道にあらず、本文の筆者は山頂より路を誤まり、溪澗に沿ひて谷戸を距ること西の方二里許の無人家の裾野に下りたることあり、その路は險惡無比なりき）

（二）甲斐國、國堺（コクカイ村名）より登る、この路は新道にして知るもの幾んど稀なり（參謀本部二十萬分一圖にこの村名なし）本文の筆者は、甲斐金峰山を西山梨郡（昇仙峽）より上り、裏山越えに、北巨摩郡小尾に下り、樫山峠を踰えて、信州平澤に到り大門川に沿ふて開ける新道を北行し、川に架けたる大門橋を渡りて、この新村より登山を果したり、卽ち橋を渡りて、向岸に到れば、又甲斐國北巨摩郡となり、信甲の境界標をこゝに建つ、八ヶ岳裾野の一部に、新に殖民せるものにして、人戸僅に六戸、（三十六年）悉く旅舍を業とするが如く、荒寥たる高原地にして東北に淺間、西南に甲斐

の白峰を座らにして看る、こゝにて導者を賃し、西と北の間に向ひて、裾野を行くなり、馬路と澗水と縱橫して、路殆んど辨ず可らず、一たび森林に入り「をゝみ平」（ダイラ）（淡海平？）より、大門の河原を橫ぎり、樵夫兼登山者宿用の小舍を東に視て、八ヶ岳の最高峰、土俗謂ふところの「赤岳摺（ズ）リ」を目がけ、一直線に峻路を登る喬木森々、榧、栂、檜等甚だ多し、上ること愈よ高くして、櫨現岳を、南に、赤岳を西北に仰ぐ、海の口の牧場の如きは、眼下に在り、愈よ上りて、石造藥師像を置けるところあり、次いで安山岩の大塊に、石造天狗を安んずる地に出ずるや、赤岳、額より生へ出でたる如く近し、竟に偃松帶となり、或は熔岩を蹈み、赤岳の小舍を目がけて上りつく、要するにこの路は、未だ所謂路を成さず、樹木の妨碍きはめて、多きを以て、困難名狀す可らず、然れども、草木は又きはめて豐饒なり。」（三）信濃國諏訪郡澁溫泉より登る、卽ち湖畔の諏訪町より北折し、霧が峰火山を仰ぎながら、北大鹽村に出で（その間に北大鹽峠あり、之を踰ゆれば甚だ近けれども、路やゝ寢雜せり、踰えずして本道を行かば、迂回なれど、路分明なり、晴天には峠にて不二を仰ぎ得）芹

ケ澤、湯川等を經て、笹原に到る、笹原は諏訪郡の最北部にして、是までは平坦の沃野なれど、以北には人家を見ず、笹原を出で八ヶ岳の裾野に到り、花の海に沒しながら、前めば、原盡きて松林となり、足指次第に仰ぐ。この森林より半里にして、路左右に岐る、即ちその右を取りて上る、八ヶ岳の半腹に當り、縱の大木甚だ多し、猶二壘許にして淙々たる溪流の音を耳にするところ、道は漸く緩やかに、谿澗に向ひ、樹木疎にして「從是澁溫泉へ九町」の標を見、溫泉場に達す、湯は酸味强くして、清冽なれど、溫度低ければ湧かして浴用に供す、上諏訪よりこゝまで約八里、この澁溫泉より山頂まで二里にして達すべし。」（この他諏訪郡立澤より、三里にして山頂に達する路あり」（四）信濃國南佐久郡、本澤（ホンサワ）溫泉より登る、この路は四道中、最も容易にして、比較的短距離なるが如し、殊に東京より信越鐵道に身を托するものは此道に由らざる可らず、即ち御代田にて汽車を下り、岩村田まで馬車にて到り、亦乘り換へて、臼田に着き、こゝにて又新馬車に囚はれ、始終千曲の奔湍に沿ひ、「馬流（マナガシ）」にて導者を賃し、千曲の左岸に沿うて上るや、一里餘にして名池に達し、

こゝにて甲州韮崎街道と分れ、右折して阪道を上り半道許にして松原村に達す、八ヶ岳の麓にして大小二湖あり、松原湖の名を以て、汎く世に知らる、一は瓢形、一は圓形を作し、其間相距ること僅に二三町にして、小川あり、兩湖疏通す、湖岸に小村落點點たり（湖を離るゝこと一里餘にして、豐里牧場に達し、幾何もなくして諏訪郡澁溫泉に出で、八ヶ岳登山道あり、前條參照）本澤溫泉の行路は、小湖畔に通るを以て、大湖は看るを得ず、松原より半里にして稻子に着く、是より傾斜緩漫、裾野は漸く山路に入らんとす、甲斐金峰山の巨體を仰ぐ、地は火山岩屑累々たり、俗稱賽の河原より馬返しに到れば、山路頓に急峻、竟に本澤溫泉に達す、借舍一戸あり、湧かして用ゆること、亦澁溫泉と同じ、この地高距已に七千尺に達す。」本澤を發して、夏澤峠に登り、八ヶ岳亂峰中の一なる、箕冠岳の頂上に達するまで、僅に三十町、（箕冠は古へ硫黃岳と言ひたるものに同じ）箕冠は絶壁を削りて、縱斷面を露はし、一望毛髮竪つ赤岳前に峙ち、阿彌陀岳下の列岳を見る、箕冠を下れば、路やゝ平坦、所謂横岳にして、是より最高點赤岳まで約三里の間、路は外輪壁の一部、尖削して針の如く、之を

上下するに、或は膝行するところあり、竟に赤岳の絶頂に到るや、三角測量標立ち、傍に小祠あり、やゝ下りたるところに、登山者宿泊用の無人小舍あり、若し夫れ山頂の大觀に到りては、不二山、兩駒ヶ岳より、白峰、赤石、御岳、乘鞍、槍ヶ岳等を西南間に收め、東には蓼科山、金峰山、國司ヶ岳、北に淺間等を見、眼下の諏訪湖、松原湖は、尺寸大の、明鏡を磨く、實に大觀中の大觀なり。」（この條（四）は主として河田默氏の紀行に據る（五）信濃國南佐久郡、板橋村より登る、說文未詳（小島烏水）

茅野から、本澤溫泉までは、七里と云ひますが、上槻ノ木を放れてからは、全く少しの木蔭もありません。ぢり〳〵と照りつける暑熱。雨後の草いきれ。ほんとうに、みんなが喘ぎました。

時として、落葉松の、ほんの尺餘の木蔭などを見出すと、みな、爭つて、そこに走り、頭丈けを、その影に寄せて、ほつとしました。

目路の限りの高原、その尺餘の影にも涼しい風はありました。

飲料水が切れて、第一に荷持が落伍。四時十五分、やつと、溪流に出會つて、呼吸を

吹き返し。喬木林に入つてから、夏澤峠を登つて、七時上の平。もう足が出ぬといふ荷持のため、皆が、その男の持物迄、各自持つてやり、肩にかけるやうにして、八時近く本澤溫泉。もうすつかり日を暮らして終ひました。

夏澤峠の登り、三十町は、實際「ニレモミ」「ツガ」などの、立派な喬木林を作つてゐて、始めて來た者の眼を愕かせます。枝差交して、日の光りも屆かぬ此深い林に、殆ど霧が卷いて、一寸休むと、汗の身體に、ムンムと蚊が來ます。「豪い蚊だれ」ふと口を開くと、自分の聲が、餘りに調子外れに、大きく、して、氣味が惡い程、四邊は寂としてゐました。

本澤溫泉は、峠を登り切つて佐久の方へ降りたところにあります。山の溫泉としては、立派な方でした。たゞ溫泉は、一町程遠方から引いて來てゐますので、溫度が低く湯壺に入つてゐて、少し、寒いほどです。浴衣のまゝ、がたぴしと、長い廊下を慄えて、座敷へ歸りましたが、併し、あとから、ぬく〳〵として、身體の、暖かくなるのは不思議なほどでした。

此處から、赤岳まで行く、案内を賴まうとすると、三人程ゐる中、一人は病氣、一人は他用、一人は明日早朝の團體について行くとかいふので、遂々手に入りません。止むなく、昨日落伍した荷持ち丈け連れて、宿のものから、敎えられた途を、順次、硫黄、横、赤、中、と傳ひ、阿彌陀の中腹から、谷に下りました。

山では霧にあつたが、雨には逢はず、却つてその霧のため、山の景色を大きく見ることが出來ました。

此道は、午前七時頃本澤を立つて、赤岳まで行き、回じ道を更に引返して、午後四時頃までに、溫泉に歸り着くのが、普通だといふことでした。

山は別に嶮しいといふほどではないけれど、横岳など、噴火壁が、非常に薄くて惡場が多く、時々、鐵の鎖に縋つたり、針金を力にして、岩壁に、蝙蝠の如く、へばりついて、やつと、越すやうな處もありました。

山の中では、横岳が一番立派でした。そこから、赤岳。中岳。阿彌陀ヶ岳の三瘤起がゆつたりと、並んだ大景と、中岳と赤岳との鞍部から、雲に隱見する横岳の斷峭を振返

つた、奇怪な景色とに心を惹かれました。赤岳の登りの急峻な事にも、一寸膽を拔かれた氣味があります。此赤岳から、中岳へ渡る道、中岳から、更にカラ澤を下る道を發見するには、可なり時間を取りました。

長いカラ澤の、石の跳躍にも、膝關節が痛むほどの目に逢つて、午後二時頃、溪流に沿ひ、それから、山を出て裾野になりました。

此日、裾野を大分下つたところ、柳川の溪谷を距てゝ見た夕の雲雄大な景色は、全く、今まで私の頭に、想像も出來なかつたものでした。

あの邊りは、多分、地圖を見ると、原村の俎原あたりであつたらうと思ふが、此邊へ來ると、例の編笠岳の尾根は、ずつと、下に沈んでしまひ、その變り、目の前に高く引いた丘陵が、一直線に、大きな幅を流してゐましたが、その黑い土坡から、むくむくと立ち昇つた雲の陣の大きさ。それは、地軸から天を貫いて、ぐる〳〵と、奇怪な柔かい曲線が渦を卷いて奔騰してゐました。

その大きな雲の渦には、夕陽の名殘りが反射して、灰色に、黃に、紫に、淡紅色に

何とも、形容の出來ぬ、深みと、淡れとに輝き、それが、秒一秒と色を變へました。ぢつと見てゐると、その中に何かしら、見えない大きなものがあつて、私を頻りに眺んでゐるのです。（北尾氏山岳巡禮より）

立科山

立科山と淺間山とは千曲川を隔てゝ相接し東信濃の風景を代表してゐる。茅野驛で下車し、所謂山の湯めぐりをやり、登山するも面白い。（瀧の湯から登る）北佐久の協和村より登り、絶頂に出で裏山を下りて南佐久の畑に出ずるをよしとする。諏訪附近からは完美なる圓錐形をなす故に諏訪富士と云はれてゐる。

山は海拔八千三百四十九尺、古來、蓼科山、諏訪富士、高井山、飯盛山とも云はれてゐる。これ山形より出でた名である。（高井は鷹居の義である）

山は、何れの口より登るも山頂迄五里乃至六里の距離がある。傾斜急峻、山頂に近き所で三十二度、少しく下りて二十八度を示してゐる。全山塊狀の熔岩より なり、頂上は巨岩累々周廻凡そ二百七十間、中央の火口江は極めて淺い。頂上に神社がある。三大實錄に陽成天皇天慶二年叙位のことが見えてゐる。山中雷鳥及び藥草に富んでゐる。

かきはなすいはほも春の色なして
松は緣に立科の山　　米澤千稻

和田山

中仙道の險路であつて、下諏訪より小諸、御代田に至る街道の難關である。海拔五千二百七十尺。上下六里。旅人の常になやみし所である。昔は中腹に、東餅屋、西餅屋あつて、名物の餅をひさいでゐた。維新の際、水戸浪士この地により

て、大いに諏訪藩士と戰闘し勤王の士多く戰死した所である。又山の附近に、和田氏の故城址がある。

山中に名草頗る多い。九輪草、下毛花、虎尾竹、釣鐘艸、紫陽花などは特に美はしい。峠からみた富士の遠望は信濃名所の一にかぞへられてゐる。

下諏訪から、上下二里の鹽尻峠をこえて鹽尻驛へ出るのも面白い。

鳥居峠

木曾街道奈良井と籔原との間に横はる山嶺で、木曾信濃兩大川の分水嶺である。海拔四千二百五十尺。（古への木曾の御坂）

新舊兩道がある。舊道は奈良井より三十町、籔原より二十五町にして山頂に達する。頂上籔原（お六櫛の産地）の山村を見おろす所に御岳神社の遙拜所がある。これこの名の起る所以である。天正十年、木曾左馬守義昌は、この地で、武田勝頼の大軍

戰つて之を破つた。

雲雀より上に休らふか峠な　芭蕉

鐵路開けて以來、峠路をこゆるもの稀れなので、行路はあれはてゝゐる。

木曾御岳

木曾福島驛の西北九里二十町。（名古屋方面の人々は上松驛で下車するもよい）登山路は王瀧口と黑澤口の二つ。普通は王瀧口から登る。

福島から王瀧登山の王瀧迄籠十二圓、強力四圓、黑澤登山道武居迄籠七圓強力三圓五十錢、松尾瀧迄籠十二圓、強力四圓、中小屋迄強力六圓、強力頂上迄兩道共十三圓、山廻り駕籠五十圓、強力十六圓。

福島驛から御岳道をすゝむと行人橋がある。之をわたり更らにオエドへゆくと道は二つに岐れる。右は黑澤口、左は王瀧口である。（途中鞍披の奇橋を見るもよい）

木曾御岳は、海拔一萬五百十一尺、日本アルプス中の盟主である。黑澤より頂上迄五里八町、王瀧より五里八町。又裏道とて日和田より登る道もあるが、頗る嶮峻である。

中仙道福島、若くは上松より登るを最も利便とす、福島より登れば、一日間にして上下し得、上松より登れば、一日間にては、困憊するを以て、山中「タノ原」の小屋に一宿し、翌日絶頂に登るを可とす、頂邊に火口五個あり、火口は大概破壞缺損す、然れども其中「三ノ池」と稱するは、最も完全にして鉢形をなし、周回一里に及ぶ、飛驒に向へる一部は懸崖にして、其の半腹より蒸氣と硫氣とを噴出す、頂には四時雪あり、小祠を鎭し、御嶽神社奥院（大巳貴命を祀る、里宮は嶽麓字黑澤にあり、縣社なり、舊曆六月十二、十三日を大祭日とす）頂より四望せば、北西に加賀の白山、能登半島を認め、北に立山の連山、槍ヶ嶽、乘鞍嶽を看る、皆白雪皚々として山頂を被ふ北東に淺間山の噴煙、上野の諸嶺を眺め、南東に八ヶ嶽、富士、駒ヶ嶽（信濃）を觀る（名勝）此地（福島驛）より御嶽山に登る岐路あり、木曾川を渉り、九里十餘町にして山

頂に達す、（摘譯）獨國ライン博士曰く、御嶽は山勢南北に奔り、山頂には八個の大火孔と、數個の小火孔を存す、大火口の六個は、山勢に沿ふて、十五乃至二十米突の高さを隔てゝ併列し、二個は飛彈に向へる北西側に位す、大底圓形にして、周回三百乃至千米突あり、其一個を除きては、甚だ深からず、而して火孔壁の處々崩壞せるを以て孔內に下るに困難ならず、火孔の年齡は熔岩及び孔內に生育せる植物によりて容易に知るを得、即ち最北の火孔今水を湛えて池となれるもの、是れ最古のものにして植物家の採取す可き奇品に富む、夫れより南向漸次に新期となり、第四火孔に至り高峻を極め、其南側より眺望最も佳なり、第六火孔は全く第五火孔壁に圍繞せられ嶮峻にして裂痕ある壁側と植物の生育せざるを見れば、最新期のものたるを疑はず、泉水の湧出せる所より下る多時にして溪流あり、其傍に硫氣の噴出するを見る、然れども有史時代に於ける御嶽の爆烈を聞かず、實に此嶽は高山植物の種類に富みたる所なり（小島氏增補）御嶽は信濃より登る道二つあり。」（一）を王瀧口といひ、福島驛より木曾街道と分れ、木曾川溪流に沿ひて行くや、道二分す、右折すれば黑澤口に至る（次

に精し）左を取りて川合峠を越え、常磐橋を渡る、福島よりこゝまで二里、已にして澤戸峠に至り、御嶽巍峨天漢に入るを正面に、仰視す壯嚴襟を正さしむ、崩越より路二分す、左は本道右は支道なれども、支道には著名なる鞍坂（アンバ）橋（世に誤りて鞍馬と書す、非なり）奇峭なる斑岩に跨がりて、奔水濃靛藍色を渦けるを見、木曾山中第一の奇橋なるを以て、支道を取るを可とす、王瀧村に至れば、本支兩道を合一す（福島より五里）王瀧は人戸約三十、谷に峙ちて軒を列れ、登山者のために宿泊業を營む、普寛堂（この路を柘ける開祖を祀る）附近より、一合目となり、二合目にして清瀧を望み、三合目にして十二社權現となる、途上神酒、雜菓、或は山頂の靈草を乾し百草煉藥と稱して鬻ぐ、裾野は初め雜木、次て草原、勾配次第に急にして、山は摺鉢を伏せたる如く、不二式に聳ゆ、四合目に近くして、八海山の小丘を右にす、草山なり、是より漸く水に乏し、次いで五合目より三笠山を見る、槽、栂等の針葉樹、欝蒼滴れんとし、熊笹狼藉す、三笠山の海拔は七千三百尺に達す、已にして「田ノ原」と稱する窪地に降る、王瀨村よりこゝまで三里なり、「田ノ原」は濕地にして短黑木を點綴

し、一望荒寥、漸く高山に入れる想ひあり「田ノ原」より山勢頓に急峻、栂、黑檜、白檜等勁風に拳曲す、七八合を經るや、五葉松横匍す、竟に九合目に達するや、偃松綠氈を布き、十合目の小屋にて、黑澤口の登山道と合す、頂上を少しく下り、頓に又峻嚴して、最高點劍ヶ峰上る、所謂奥の院にして、十合目より十八丁。遙に一萬尺を超ゆるを以て、天風常に怒吼し、空氣の氣壓低力、盛夏綿衣を重れて、猶震慄す、甲斐、駿河、美濃、飛彈、信濃の大嶺高嶽を雙眸に入る、不二は南東、加賀白山は西、乘鞍嶽、鎗ヶ嶽、立山は北に、美濃惠那山は西南に、信の駒ヶ嶽は東に、淺間山は北東に、いづれも長揖す。」朝々暮々、氣象萬千、我をして傲睨一切、人天の王たらしむ十合目の小屋より、左に月の門、日の門といふ燒石の門穹「アーム」あり、その前の深谷より硫煙を颺けて、四周の土を赭するを、地獄谷となす、劍ヶ峰より下れば、一ノ池、二ノ池、三ノ池、四ノ池、五ノ池等を見る、皆舊火山噴火口に、天水を瀦蓄せるもの、一ノ池最大、周回三十町なれども水なし、二ノ池やゝ低くして、水充つ、三ノ池は北に下り、四ノ池は水涸れて黑百合に下の名草を生ず、五ノ池は絶小言ふに足ら

す、この附近、高天原、賽の河原、摩利支天峰等、皆在り。」(二)は即ち黒澤口にして福島より黒澤村本社まで三里、その間合戸峠を越えて、御嶽正面に仰ぐ、本社前より右折して、三合目に含滿瀧、四合目附近に日の出瀧、松尾瀧を見る、(本社より一里半)更に二里にして六合目の中小屋(ナカコヤ)に達す、實に山の中腹に當る、五合目よりこゝに至るまで、喬樹長幹、森々天に參すれども、八合目に至れば、層岩磊々、赭突し、山勢聳直行歩最も惱む、九合目にして覺明社あり、(この山の開拓行者、覺明を祀る)竟に絶頂に達し、王瀧口と合す、(絶頂の記事は王瀧口參照)中小屋より絶頂まで三里。」信州よりは、此他西野、及び瀬戸原よりする二道あれども、偏僻にして不便なれば、記を省く。」飛彈より登る口二、岐阜街道に當れる飛彈益田郡、小阪村小阪より同村落合に至り、濁下溫泉)俗に嶽の湯)を經て、上り、他は飛彈高山を距る、南方五里なる益田郡朝日村胡桃島の寒村より上りて、同じく濁河溫泉に出づるもの。」(一)東南溪に沿ひ、暗八町と稱する巨樹大木の間を上り、牛が鼻洞の大洞窟を見る、深さ十五間、燭を秉らずんば入る可からず、已にして又溪澗に出て、玄武岩の一大劈開、層

六方柱の層々累々相重り、高さ七八丈、巾十丈に餘れるを見る、溪を渉りて「原八町」を越ゆ、稍や坦なるを以て、名けども、實は半里餘あり、已にして山路急峻、巨檜老杉蔚翠、それより角助原、兵衛谷を跋渉し、濁河溫泉に至る、溫泉は三ヶ所より湧出す、(上流炭酸泉、中流鐵泉、下流硫黄泉)此地海拔六千尺以上、是より山路急峻、里許にして喬木を絶ち、偃松帶に入るこゝを過れば一木もなくして、只蘚苔地衣の岩石に被衣するを見る、嶮道數町にして、削崖崔嵬たる嶽上の背梁骨に立つ、眼下は卽ち地獄谷、是より荒凉の平原、賽の河原に下る、對面に二個の岩壁あり、東を阿留摩耶山とし、西を摩利支天山とす、その中央に屹立するは、繼子嶽にして、背後に在るを繼母嶽といふ、信・飛兩州の山境なり、濁河溫泉より頂上まで三里。」下瞰すれば、氷雪累々たる三ノ池あり、(以上絶頂の記事は、王瀧口を參照すべし)要するに信州道に比すれば、急峻彼に倍し、道程は彼に半す、趣味多きは彼に遜れり。」(二)乘鞍嶽麓、野麥より高根鑛山に至り、五十三峠(海拔五千尺)を超へて、胡桃島村を經、(或は高山町より胡桃島に至り)濁河溫泉に達して、こゝより登る。(以下前項參照)

木曾路云ふ

開山及由來

抑も御嶽登山は、往昔醍醐帝の御宇白河殿御勅使として、登山あり、後木曾義昌公も登山せしが、是より後中絶して登山するものなかりき。然るに、天明六年、覺明行者、黑澤口を開き、次ぎて普寛行者寛政四年に王瀧口を開けり。

御嶽講祖は、覺明、普寛、一心、一山の四行者にして、信徒も亦覺明講、普寛講、一心講、一山講と相分れ、各其講祖登山の跡を慕ふて、登山する慣習あり、されば或は、黑澤口より登山するあり、或は王瀧口より登山するあり、この兩登山道いづれも旅舍完備し、一合目毎に、必ず小屋の設けあれば、登山者の休泊に事かくこと更になし。

頂上の眺望

御嶽は、信濃、飛彈兩國に跨る、乘鞍山脈中にありて、西筑摩郡及益田郡の境上に聳ゆ、實に海拔、一萬百十八尺、信州第一の高山なり、夏季登山するもの毎歲三萬餘

人と號す、多くは、白衣に菅笠、金剛杖の裝束なり、今は道もよく開け、婦人小兒も亦登るを得るなり。いづれの口より登るも、九合目若しくは頂上の小屋に一泊し、早天日輪を拜すべし、實に壯觀なり。

頂上の眺め眞に雄大なり。南方、鬱蒼たる阿寺山脈は、遠く美濃に及び、東方、駒ヶ嶽最も近く南に延び惠那山に連る。赤石山は其又東に聳え、一帶の峯頭を露はす、しかも其奥淡く畫き出されたるは富士山なり。

これより、左に八ツ岳、蓼科山、と相踵ぎ煙を吐けるは、淺間山なり。北方乘鞍岳の尖峰巍然として、高く雲表に聳え、尙、其北方に、峰頭參差たる連峰あり、著しく尖れるは鎗ヶ岳にして、其右方乘鞍岳に近く長き峰脊を有するは穗高山なり。猶、其奥に數多の高峰連立するを見る、是飛驒山脈にして、遠く越中立山を、かすかに望むべし。西北に、あたり禿頭の秀峰聳ゆ、これ加賀の白山にして、其山脈亦頗る宏大なり。

麓の諸山恰も畝の知く又波の如し。